

裏切りの代紋（中編4 悦虐編）

人間ヨーヨー

精力絶倫の村崎會の幹部連中に抱かれ、続けざまに何度も頂上を極めさせられ、完全に意識不明となった何人かの娼婦達が、若い衆の運び込んだ担架に乗せられ運び去られた。

まだ意識のある女達は、何とか自力でこの部屋から立ち去ったが、皆腰が抜けてしまい、まともに立ち上がる事が出来ず、犬の様に四つん這いの姿勢となって這い出ていった。

そのヨロヨロと腰をよろめかせる姿に男達の笑い声が上がった。

それと入れ替わる様に、別の若い衆が乾いた雑巾を手にして現れ、男女の愛液で濡れた畳の上をテキパキと拭き取り、それが終わると剛沢の愛人達が新しい飲み物と肴を載せた膳を並べた。

剛沢の無駄の無い応接に村崎會の幹部連中が満足げに肯いた。

新しい膳が各人の前に行き渡った所で、部屋を仕切っていた襖がサッと開かれた。

そして、襖で遮られていた隣の部屋の様子が目に入って、男達はオッと驚きの声を上げた。

男達の驚きの表情を確認して剛沢が満足げに肯いた。

男達が驚きの表情を見せる視線の先には、家の柱に使う様な太い白木の角材により櫓のような物が何時の間にか組み上げられていた。

太い角材で四隅に柱を立て、その柱の間を渡す様に梁が走り、長方形の箱のような骨組みを作っていた。

そして、その櫓の中心部に、晴江、お竜、暁美の三人が全裸で胡座縛りされた形で宙に吊されていた。

後手に縛られ上半身を硬く麻縄で縛り上げられた三人の女は、両脚を胡座に縛られ、両足首を揃えて縛った縄は首の後を通して引き絞られ、身動きを完全に封じていた。

雁字搦めに縛り上げられた女達は、まるで一つの荷物のように櫓の天井の梁から垂れる一本のロープにより宙に吊り下げられているため、女達の身体がフルフルと左右に弱く回転していた。

啞然として見詰める男達の視線の先で、胡座に縛られた宙吊り姿のため、隣の部屋の男達に

向かって開き切った股間の佇まいがチラチラと目に映った。

櫓の基部の横桟には幾つもの小型のスポット照明が取り付けられており、剃毛されて隠しようにも無い女の秘裂の奥の方まで影も作らず照らし上げていた。

その開き切った股間から櫓の床面までは、20センチ程の間隔を残して吊り上げられており、女の最も肝心な部分の僅かに下にはやはり20センチ近い長さの太い張り型が今にも秘奥に食い込みそうな形で設置されていた。

その細長い張り型は、まるで竹槍のように垂直に立てられ、すれすれの間隔を置いて開口する女の肉の洞窟を真下から狙っていた。

女達を宙吊りにする際に重心位置を良く確認して吊り上げて固定した様で、一本のロープだけで宙吊りにされた女の身体が、時々弱く左右に回転することはあるが、その肝心の部分は常に回転の中心に在るように固定されており、ほんの僅かな間隔を置いた真下には禍々しい巨大な張り型が、直ぐ真上に位置する秘孔に冷たく狙いを定めていた。

その雁首を模した直径4～5センチ程の丸い穂先は、すれすれで女の秘肉には達していなかったが、少しでも吊られた女の位置が下がれば、秘孔の中に貫通することは明らかであった。女達は白い日本手ぬぐいで猿轡を嵌められ、宙吊りにされながら諦めたようにジッと身体を動かすことはなかった。

女達は白いロープにより天井の梁からぶら下げられ、そのロープは梁に設置された箱の中に消えていた。そして、その箱からは無数の同じ白いロープが飛び出し、ピンと張ったロープの端は、女達の背面の櫓の基部に固定されていた。

啞然として見詰める男達に、剛沢が説明を始めた。

「みんな、縁日なんかで紐の先端に付いた景品を当てさせる遊びが在るのを知っているだろう？何本も在る紐の内から好きな一本を選んで、その紐の先にぶら下がった景品を当てると言う遊びだ。」

好奇心で宙に吊された全裸の女達をじっと眺める男達を見回しながら、言葉を継いだ。

「これは、言わばその遊びの逆バージョンだ。女達の後に30本のロープがある。その内何本かが当たりのロープで、後のロープは外れのロープだ。これから一人ずつ鋏でロープを切っていく。当たりのロープを切れば女の身体は下に落ちて、真下に待ち構えている張り型が女のアソコに食い込むって寸法だ。一度に6～7センチ程落っこちて、三回当たれば畳の高さまで落っこちて、張り型の根元まですっぽり女の身体の中に食い込むことになる。」

剛沢の説明を聞きながら、自分の全体重を載せてあの張り型を体内に押し入れた時の姿とその落下の衝撃による激烈な苦痛を想像して、男達は目を見開いて女達の様子を見詰めた。

「また、馬券を作っておいたから、元目高組の女達の誰が最初にあの太くて長い張り型を腹の中にすっぽり納めるか投票してくれ。最初に地獄の底まで落としたヤツには景品も用意してあるぜ・・・」

剛沢の愛人達が投票箱を持って男達の間を回り、掛金と投票用紙を回収して回った。

女と博打には目の無い男達なので、今回も何枚もの札びらが飛び交った。

男達は籤を作ってロープを切る順番を決めた。

総勢14人で30本のロープを切る訳だから一人2回ほど切るチャンスはあるが、切る順番が一番最初では、女達を下まで落とすチャンスは少ないかも知れず、一番最後では自分の前に他の人が落としてしまう可能性が高い。

男達は真剣な表情で籤を引き合い、順番を決めていった。

最初の籤を引き当てた安達が鉤を手に立ち上がると、口元を淫猥に歪め目に残忍な光を浮かべてイソイソと女達を吊す櫓の方に進んだ。

女体の背後に並んだ幾つものロープを手にして、一本一本その張り具合を確認して行った。宙に吊された女達が、不安そうな表情を浮かべながら、安達の動きを横目で追った。何本ものロープを確かめた後一本のロープに決めて鉤を掛けた。

裏方の大亜門戸会の若い衆が雰囲気盛り上げるため、ドラムの連打を録音した効果音を鳴らした。

ドラムの音が鳴り響く中、プツリとロープを切断したが、何も起こらなかった。

宙に吊られた女達はホッと安堵の表情を浮かべ、安達はガッカリと肩を落とした。

その後3人がロープに挑んだが、やはり何事も起こらなかった。

ところが5人目の城島が効果音の中で、ロープをプツリと切断するとそれと同時に暁美の身体がドスンと落下し、激しい悲鳴がドラムの音を打ち消した。

銀子から受けた肉体改造により何時でも何処でも前技無しでも男の肉棒を受け入れられる体に調教されていたが、自分の全体重を受けて下から抉り上げる陰具から与えられる激痛に暁美の目が裏返った。

全体重を載せて落下した暁美の身体が直ぐ下に待ち受ける張り型に貫かれて、深々とその女体の割れ目の奥に埋没したかと思った刹那、今度は逆に真上に引き上げられる様に暁美の身体が上昇始めた。

表からは見えないが、女達を吊す天井の箱の中には強力なバネが仕掛けられているようで、そのバネの反発力が減衰するまで、暁美の身体は張り型に刺し貫かれたまま、まるでヨーヨーの様に何度も上下にピストン運動を繰り返した。

激しい衝撃の中で、剛沢が自分達に猿轡をしたのは、声を封じるためだけではなく、舌を噛ませない様にするためだったのだと気付いた。

物凄い勢いで降下して、周囲の肉を引きずり込むように張り型を深く呑み込んだ次の瞬間、今度は上昇を始め、先端の太い雁首の付け根が、鮮やかなピンク色した内奥の襞を引きずり出すようにその醜い姿を現した。

周囲に幾つもの取り付けられたスポット照明により、竹槍のように垂直に立てられた責め具の上で何度も何度も暁美の秘裂が上下する様子が在り在りと照らし上げられた。

バネの勢いが無くなるまで、張り型の太い雁首を膣内に残したまま、激しく上下に振動を続ける苦痛に暁美が眉根に皺を寄せて苦悶の呻き声を上げた。

両脚の指が苦しげにグッと内側に折り曲がった。

暁美の左右に宙吊りになった晴江とお竜も心配そうに上下動を続ける暁美の姿を見続けた。

バネの反発力がすっかり減衰して静止するまでの間は一分にも満たなかったが、永遠に続く苦痛の様に思われた。

また暫く、空くじが続いた後、壊し屋がロープを切断すると、今度はお竜の身体が激しい衝撃を伴って落下した。

自分の全体重を載せた反復運動にお竜も身も世も無げに悲鳴を上げた。

張り型を肉洞内に収めたままの激しい上下動に身悶え続けた。

その後何人かが空くじを引いた後で、村崎がイソイソと立ち上がって嘗める様な目で、太い張り型を深々と華肉の中に咥え込む暁美とお竜の姿を間近からジックリと観察した後、一本のロープを選んで切断すると、再びお竜の身体がドスンと落下した。

再び強力なバネにより激しいピストン運動を繰り返しながら10センチ以上張り型を下腹に突き立てられたお竜が、額に脂汗を浮かべて苦痛の伴った悲鳴を上げた。

「おやおや？お竜姐さんが最初にリーチだぜ！」

その様子を見ながら、剛沢が楽しそうに声を上げた。

今や、お竜が10センチ以上張り型を呑み込み、暁美が6センチ程呑み込んだ状態で宙吊りとなっていた。

晴江の身体には、未だ張り型は食い込んでないが、二人の様子を心配そうに見詰め、次は自分の番では無いかと怯え、宙吊りになったまま恐怖に身体を震わせていた。

お竜を頭に馬券を買っていた、松林と言う男が勇んで鉈を手にして女達に近づいた。

これでお竜を下まで落とすことが出来れば、お竜を頭に買った連勝単式の自分の馬券は大きく当たりに近づき、最初に女を落とした景品まで手にする事が出来ると胸算用をして、大きな期待を持って鉈を入れたが何事も起こらなかったのもガッカリした表情で次の男に鉈を渡した。

次の男が鉈を入れると、激しい悲鳴を残して暁美が落下した。

華肉を深く抉る激痛に暁美が悲鳴を上げ続けた。

「これで暁美も追っかけリーチだぜ！」

剛沢が楽しそうに声を上げた。

暁美を頭に馬券を買っていた男達から歓声が上がった。

銀子も混じって剛沢の愛人達が男達の間を回り、酒を注いで回ったが、男達の関心は串刺しの女達の方に注がれており、手にするコップの中の酒が無くなっているのも気が付かない様子であった。

女達も酒を注いで回りながら、薄ら笑いを浮かべ、猟奇的な目を宙吊りの女達に注いでいた。

「良くできてますね。いったいどういう仕掛けになっているんですか？」

隣に立つ黄原が剛沢に問い掛けた。

「これか？・・・まあ、電気工学と機械工学の粋を集めた仕掛けって訳だ。・・・まあ、そんな大げさなもんじゃないがな。・・・何時もお前に女体責めのアイデアを考えて貰っているからな。・・・たまには俺も何かアイデアを出さないと。俺は町工場の^{せがれ}に生まれ、小さい時から親の手伝いをして来たから、こういう仕掛けを考案するのは得意なのさ！」

と、鉈を手にもって女達の方に向かって行く男を目で追いながら自慢げに答えた。

暁美とお竜がゴールまで後僅かな状態まで追い込まれ、圧倒的に不利な状況に追い込まれていたが、何故かその後、二人は現在の状態に止まりそれ以上落ちる事は無かった。

その間に晴江の身体が先に落下した。

その瞬間を迎える事を怯えていた晴江が、遂に自分の番が巡って来て、空気の抜ける様な悲鳴を上げて張り型に刺し貫かれた。

腹の中に竹槍の様な張り型を納めたまま上死点と下死点の間を何度も往復して、額に玉の様な汗を浮かべて苦悶の悲鳴を上げ続けた。

そして、次の男が鉋でロープを切ると、何故か立て続けに晴江の身体が落下した。

未だ、最初の落下の衝撃が癒えない内に再び、深く刺し貫かれて、全身が蒼白となり脂汗を浮かべて、落下の衝撃とそれに引き続く激しい上下運動に苦悶した。

今や三人の女は長い張り型にその身を深々と刺し貫かれ、横一線の状態となっていた。

晴江を頭に投票していた男達が、盛り返して来た晴江に歓声を送った。

その後3人空くじが続いて、村崎に二度目の順番が回って来た。

残りのロープは5本となっており、2本を残して3本は当たりの筈であり、最早どれを切ってもどれかの女を地獄の底に叩き落とす確率の方が高くなっていた。

村崎が慎重にロープの張り具合や、状況を見定めて、一本のロープを選び、鉋を立てた。

その瞬間、絶命する様な悲鳴を残して晴江の身体が落下を始めた。

尻が床にぺったりと着いて、垂直に立つ長い張り型を全て下腹に収めたかと思った次の瞬間、強力なバネの力により無理矢理床から引き剥がす様に、高く垂直に持ち上げられ、再び落下を始めた。

一番最後だけバネの種類を変えているのか、これまでに無い程の長いストロークで床面と上死点の間を往復させられた。

そのピストン運動の距離は10センチを超えており、まるで竹槍のような張り型が深々と晴江の下腹を貫き、また引きずり出される様子がまざまざと映った。

毒々しい張り型の表面は晴江の膣孔から絞り出された潤滑液に塗されたように艶々と輝いていた。

連続したダメージから回復しないまま今又激しいダメージを女の最も大切な部分に受けて激しく上下に揺すられながら、白目を剥いて、口から泡を吹いて意識を失ってしまった。

徐々にバネの振動は収まって行き、やがて床面から僅かの距離を置いて晴江の身体が静止した。

床から生え出した張り型がしっかりと晴江の秘裂に収められている様子が正面から見詰める男達の目に映った。

床面から僅かの高さで、まるで宙に吊した荷物の様に胡座縛りに吊り上げられている晴江の身体を地面から生えた杭が動かない様に支えているように見えた。

晴江は完全に意識を失っており、宙吊りのまま張り型に貫かれた状態で、身動きすることも

無かった。

自らの下腹に張り型を収める苦痛に喘ぎながらも、曉美とお竜が心配そうに晴江の姿を見詰めた。

やがて晴江の裸体を宙吊りにしていたロープの滑車がカラカラと回り始め、意識を喪失したままの晴江の身体が静かに下降し始めた。

その動きに併せて、床面と股間との間に僅かに姿を見せていた張り型の根元の部分が、ズブズブと股間に収められて行った。

尻が床にぺったりと着き、張り型は根元まで下腹の中に没しその姿は見えなくなった。

晴江を宙に吊っていたロープはすっかり弛み、胡座縛りにされ、後手縛りで上半身を硬く縛り上げられていた晴江の身体が、その部分で床面と繋がったまま、ゆっくりと崩れる様に前のめりになった。

下腹を挟む太い棒の圧力か、緊縮力を喪失した股の間からは膀胱に溜められていた小水が滲み出し、床の上にジワジワと染みを拡げていった。

この様を目にした男達が、指差して笑い声を上げた。

胎内に納めた長い張り型が^{つか}え棒となって、意識を失った身体が横倒しに成るのを邪魔していた。

晴江を頭に投票していた連中が歓声を上げた。

外した連中は悔しそうに投票券を放り投げた。

最初に女を下まで落とした事に対する景品が銀子の手により村崎に手渡された。

村崎は、包装紙でくるまれた大きな箱を嬉しそうに頭上に差し上げた。

再び賭けに戻って、一人空くじを引いた後、今度はお竜が悲鳴を上げながら落下した。

晴江の時と同じ様に。深々と女の奥を張り型が挟った後、天井のバネに引き上げられて飛び跳ねる様に大きく上昇し、再びその反動で勢い良く滑降した。

こうしてヨーヨーの様にお竜の体はその太い真下から生えた張り型に刺し貫かれながら、勢いを失うまで何度も上下した。

そして、動きが完全に停止した後、晴江の時と同じように吊り下げていたロープが自然と緩み、股間が床に密着するまで下降し、その長い筒具を全て体内に呑み込まれることとなった。

その激しい苦痛に流石のお竜も白目をむいて悶絶し、小刻みに下腹を痙攣させていた。

これで三連単の勝敗は、全て決まり、的中させた男達が小躍りして喜んだ。

僅かな所で勝利を逃した男が悔しそうに投票券を投げ捨てた。

暁美の左右の床面には下腹を長い張り型に刺し貫かれた晴江とお竜が胡座に縛り上げられたまま床に尻餅を着いていた。

晴江はガックリと首を前に折りグッタリと死んだ様に俯していた。

胡座に縛り上げられた股間の周囲は体内から溢れ出た汚水で池のようになっていた。

お竜は落下の衝撃により引き起こされた激しいピストン運動の余韻が未だ治まらないのかビクビクと腰を痙攣させながら、猿轡を嵌められた蒼白の顔を振り続け、苦悶の呻き声を上げていた。

二人とも下腹を貫く長い張り型により下半身に芯を入れられたようになり、仰向けや横倒しになることも出来ないようであった。

いよいよ暁美が地獄の底に落下するまでに残りのロープは2本となっていた。

張り型の穂先を深々と体内に収めたまま、先に落下した二人の様子から、最後の落下のダメージを想像し、宙に吊られたまま恐怖に打ち震えていた。

無意識の内に腰がブルブルと震えていた。

その時剛沢が前に進み出て、櫓と隣の部屋の男達との間に立った。

「ご覧の通り、勝敗は既に決した。そして最後に残ったロープは2本だ。お嬢が地獄の底まで落っこちる確率は二つに一つだ。どうだ？ここは最後にお嬢自身に天国か地獄行きか賭けさせて見ないか？」

突然、剛沢が前に進み出て意外な事を言い出したので、村崎會の幹部連中は驚いたような表情を浮かべたが、それも面白いと考え直した。

好奇の目で見詰める村崎會の連中の同意を得て、剛沢が鉈を手に櫓の背後に回った。

秘孔を張り型に深々と刺し貫かれ、上半身を硬く縛り上げられたまま宙吊りにされた不自由な姿勢で暁美が後を振り返った。

恐怖に怯える目で自分の方を見つめる暁美に剛沢が言った。

「ここに二本のロープが在る。一本は当たりのロープで切ればお前は田楽刺しだ。もう一本は切っても何も起きない。そのままお前を助けてやろう。どちらのロープを切るか選ぶのはお前だ。」

こちらか？それともこちらか？剛沢は二本のロープに交互に鉈を当てながら暁美の反応を確

かめた。

もちろん暁美にもどちらのロープが当たりか判断の仕様が無い。

猿轡を嵌められたまま、何かに縋る様な怯えた目で剛沢の動きを見詰めた。

剛沢が鉋を左右に動かす度に、観客席からそっちだ、いやこっちだと無責任な声が上がった。

暁美の反応が無い事に苛ついた様に、それじゃこちらのロープで良いんだな？と大声を上げると、手元のロープに鉋を入れようとした。

思わず暁美が激しく頭を振った。

それじゃこちらで良いんだな？と剛沢がもう一本のロープを示したので、追い詰められた暁美は仕方無く首を縦に振った。

酒席の男達が残酷な物を目にたたえながら成り行きをジッと見守っていた。

暁美の選んだロープに剛沢が鉋の刃先を当てた。

プツリと切断する際に剛沢の口元がニヤリと笑った様に見えた。

断末魔の悲鳴を残して暁美の身体が落下し始め、男達の野蛮な歓声が上がった。

櫓の下では三人の女が下腹を串刺しにされたまま死んだようにグッタリとしていた。

下腹を貫く大きなモノに膀胱を圧迫された為か、意識を失ってソコの緊張が緩んだためか、女の急所を真下から貫かれる胡坐縛りのまま、女達の股間の下には秘奥から染み出した黄色い秘水が水溜まりを作っていた。

隣の部屋では剛沢も混じって男達が、凄まじかった賭の余韻を楽しむ様に大きな笑い声を上げて酒を酌み交わし合っていた。

若い衆が次々と新しい肴を運び、銀子と剛沢の愛人達が酒を勧めて回った。

酒宴は最高潮に盛り上がっていた。

ステージショー

夜を迎え、村崎會の幹部達が幾つかの丸テーブルに分かれてディナーを楽しんでいた。

一つのテーブルには2～3人の男が着席し、その両脇には大亜門戸会の経営するキャバレーから呼び寄せられた女達が、隣の男に身体を密着させる様に侍っていた。

これまで、和室での饗応ばかりが続いていたので、趣向を変えて、まるでナイトクラブの様

に会場を設え、村崎會の幹部を饗応していたのだった。

幾つかに分かれたテーブルが半円形に取り囲む中心には、ステージが設けられていた。

客のテーブルは播り鉢状に設置されていたので、どのテーブルからもステージを見下ろす形となり、ステージの上の様子を遮る物無く眺める事が出来た。

薄暗く照明を落とした観客席に取り囲まれた、ステージでは大亜門戸会の経営するストリップ劇場から呼び寄せられた、踊り子が卑猥な艶技を見せていた。

天上からはミラーボールが吊り下げられ光の粒が右から左に流れ、舞台の袖からは大亜門戸会の三下組員が赤やピンクのスポットライトを操作して、舞台の上のストリッパーを照らし上げ、官能的な音楽を大音量で流していた。

淫猥なショーに官能を昂ぶらせた男達が、隣に待るコンパニオンのドレスの胸元に手を差し入れ、乳房を揉み上げたり、スカートを捲り上げて、股間に酒を流し込みワカメ酒だと乱痴気騒ぎを繰り広げ、女達に嬌声を上げさせていた。

村崎親分や村崎會幹部をもてなすため剛沢が用意したショーの出し物は次々と進み、今さつき、トリとして綺囃囃の花電車の艶技が終わった所であった。

綺囃囃の自らの下腹の筋肉を駆使した超絶した淫靡な技を目の前に見て、興奮冷めやらぬ村崎會の幹部達が、

「昨日はお竜姐さんの花電車の技にビックリさせられたが、流石に綺囃囃姐さんのマ^黒芸は年期が入っていてひと味違うぜ！」とか、口々に興奮した声を上げるのだった。

ショーが終わったばかりで、淫技に使った数々の小道具を投げ入れたバスケットを小脇に抱え、観客席に手を振り笑顔を振りまきながらステージから下がる綺囃囃に向けて拍手を送り続けるテーブルの男達の背後に二人の和服姿の恰幅の良い年増女が姿を現した。

そして、そのままテーブルの間の狭い隙間を掻き分ける様に歩み続け、中央のかぶりつきのテーブル席に陣取る村崎の横に立つと、強引に両隣に待るホステスを押し退ける様に退かすと村崎の両脇にどっかりと腰を降ろした。

「おお！これは^{さつき}皐月と^{あやめ}菖蒲やないか？」

突然両側に腰を下ろした二人の和服姿の中年女の顔を眺めて、村崎が嬉しそうな声を上げた。

「ほんまに二人には、昔よおけお世話になったな・・・」

と、二人の中年太りして肥大した女の顔を交互に見詰めながら、ニコニコと話し掛けた。

「ええ、本当に・・・まだ男の事も良く分からないネンネの頃に親分に抱かれて男の良さを教

えて頂きましたよ・・・」

皐月と呼ばれた女が、厚化粧の白塗りの顔に目の回りだけ墨を塗りたくった様な気味の悪い顔に思い切り笑みを浮かべて、村崎の方に流し目を送りながら喋った。

「親分からは、お尻の穴の気持ち良さも教えて頂いて、・・・初めてお尻に突き立てられた時は、暫くの間お尻の穴が疼いて疼いて夜も眠れないもんでしたよ・・・」

これまた衰えた肌に化粧を塗りたくった菖蒲が口元を押さえながら笑った。

「ホンマ、久しぶりやの・・・ほんでお前ら今何をしてんや？」

「はい、私たち双子姉妹は親の借金の形に目高組の売春宿に売られ、何年か前にやっと借金も返し終えて、晴れて自由の身にはなりましたが、20年も泥水の中に沈み込んだ身体が今更綺麗な身体になる訳でもなく、娑婆に戻っても行くあても無いので、そのまま遣り手として売春宿に残してもらって若い娘の世話をしていたんですよ。」

「女の子には月のモノってのが有りますから、それ以外にも病気になる様に体調管理に気を配ったり、お茶を引いている娘に客をあてがったり、女の子と客の間に揉め事が起きた時に間に入ったりと・・・これでも結構忙しいんですよ。」

「それが、今回の大垂門戸会と目高組の抗争の結果、目高組の持っていた縄張り一切が大垂門戸会の物となり、私たちの売春宿もそのまま大垂門戸会の持ち物になりましたが、剛沢親分の計らいで私たちも遣り手婆として相変わらず使って貰っていたんですよ。」

村崎を間に挟んで、双子姉妹の姉の皐月と妹の菖蒲が交互に口を開いた。

「今日剛沢親分に言い付かって売春宿の中でも選り抜きの女の娘達を送り出したんですよ・・・」

「所が、その娘達が村崎會の猛者の皆さんのお相手をして半死半生の状態で帰って来ましてね、・・・色々話を聞いてみると、元目高組の大姐とお嬢と壺振りの二つ龍のお竜姐さんが、最低の性奴隷となって、村崎會幹部や村崎会長のお相手をしていたと聞かしてね！」

「噂では大姐やお嬢やお竜姐さんが、大垂門戸会の最底辺の娼婦に身を墜としたとは聞いていましたが、まさかあの気性の激しい大姐達に限って考えられない・・・本当の事だとは信じられなかったのですが・・・」

「それで、ぜひこの目で確かめてやろうと、剛沢親分にお願ひして、此処に来た次第なんですよ。」

「元々私たち双子の姉妹が年季も明けて自由になった後も忌まわしい思い出しかない売春宿を離れなかったのは、他に行く場所が無かったのもありますが、何時か大姐達に長年に渡っ

で自分たちの生き血を啜ってきた恨みを返してやろうと心に秘めて、近くに居ればその機会も在るだろうとチャンスを窺っていたのですよ！」

「まさか、本当に、こんなに早く機会が回って来るなんて、私じゃ剛沢親分が神様か仏様に見えますよ！」

「おいおい、縁起でもねえ！仏様は止してくれ！」

隣に腰を下ろして二人の話を耳にしていた剛沢が、大きな笑い声を上げて割って入った。

「まあ、そう言うことだ。この後、大トリとして晴江達がステージに上がるから楽しんでいてくれ。」

と、村崎を挟んで陣取る二人の双子姉妹の方を見ながら声を掛けた。

綺羅羅がステージから立ち去り、興奮状態も静まった会場では再び照明が落とされ、次の出し物に向けての期待でシーンと静まりかえった。

そして、薄暗いステージに向けてスポットライトが交差した。

交差するスポットライトの反射を受けて、会場の男女の期待感が一機に昂揚した。

観客の興奮を煽る様な激しい音楽に同調して激しく左右に振られていた幾つもの光の筋が一点に集中してピタリと止まり、観衆の目が幾つものライトに目映く照らされた一点に集中した。

スポットライトにより明るく照らし上げられた楽屋と仕切るカーテンがサッと開かれ、そこには裸姿の晴江達が立っていた。

ステージを見下ろす男達の視線が、艶めかしい3人の裸女達に釘付けになった。

緊縛されて抵抗を封じられた女を犯す事を好む村崎の変態的嗜好に配慮したのか、三人とも麻縄で後手に高手小手に縛り上げられていたため、形の良い乳房を上下から括り出す様に縄掛けされ、胸を大きく前に突き出す様な格好でステージに直立していた。

そして女達の股間には、柔肉を挟る様に、きつく六尺褌が絞め込まれていた。

3人の身体を覆う物は胸の亜麻色の麻縄と下半身の鮮やかな色の六尺褌だけであり、ステージに上がる前に全身にオイルを塗り込まれたのか、女達の白い身体はスポットライトを反射して艶やかに輝き、男達の好奇な目線に裸体を晒していた。

昨日から何度も村崎會の男達の目に裸身を晒し続けた晴江達であったが、今又ステージに押し上げられ目映いスポットライトを全身に浴びせられ、隠しようも無く恥ずかしい姿をかつての奈和と親子兄弟の杯を交わした男達の目に晒す悔しさに唇を噛みしめた。

晴江達の登場にすっかり酔いがまわった村崎會の男達の興奮が最高潮に達し、歓声を上げピューピューと指笛を鳴らした。

「やっぱり男勝りの姐さん達だ！妙に禪が良く似合うじゃないか！」

成熟した女体に男の様な六尺禪を着けさせると言う、全裸姿を晒すより一層卑猥で屈辱的な姿に身悶える女達の様子を眺めて興奮した男達が喚き立てた。

皐月と菖蒲の双子姉妹も以前自分達の生き血を吸う様に酷使していた目高組の女達が晒す滑稽な姿に思わず吹き出した。

晴江は白い禪を締めさせられ、脇腹から腰に向かって彫り込まれた極彩色の刺青と鮮やかな対象を示していた。

お竜の肉付きの良い雪のような白い肌にアクセントを付けるように鮮やかな緋の禪が下腹に絞め込まれていた。

そしてファッションモデルの様な均整の取れた暁美には、その若さを象徴する様に濃いピンク色の禪が絞め込まれていた。

「禪を締めた気持ちはどうだ？自分が男になったような気分じゃないか？」

「そのままグルッと身体を回して、禪が尻の間に食い込んでいる所を見せろ！」

酔いの回った男達が禪姿でステージに上がった女達に盛んに揶揄した。

男達の卑猥な声援を浴びてステージの上で立ち尽くしたまま、女達が恥ずかしそうに顔を背けた。

目高組の女達に深い恨みを抱く、皐月と菖蒲も晴江達の惨めな姿に溜飲を下げ、村崎會の男達に混じって盛んに卑猥な野次を放った。

屈辱に耐えステージの上にたたずむ目高組の女達の耳に男達の声に混じって女の罵声が聞こえた。

ふと声の方を見ると、村崎親分を両側から挟む様に元目高組で売春行為を強要していた皐月と菖蒲が座って自分達を語る様に大声を上げている事に気付いて愕然とした。

そして、かつて自分達が力で支配して、男に肉体を売ることを強要していた女達から現在の落魄れた姿を見られる惨めさに顔を赤らめ深く項を垂れた。

「お前達、何を何時までの舞台の上でモジモジしているんだ？早くショーを始めないか！」

禪一本身に着けただけの、全裸を晒すより或意味恥ずかしい姿で、羞恥と惨めさに身悶えステージに立ち尽くす女達に業を煮やした様に剛沢が怒気を上げた。

「まず、こちらにそのデカイケツを向けて尻振りダンスでもやって貰おうか・・・」

大音量の艶めかしい音楽が流れ始め、それに促される様に、女達は首を項垂れたまま客席に背を向けると前屈みの姿勢を取り、尻を大きく男達の方に突き出し、横一列に並んだまま音楽に合わせて双臀を輪を描く様に大きく舞わし始めた。

高手後手に縛られた不自由な上半身を大きく前に屈めて思い切り臀部を客先に向かって突き出し、音楽に合わせて卑猥なダンスを披露するのであった。

晴江の半分まで色鮮やかな刺青に覆われた双臀の中心部を通る白い鼠蹊部が、男達の目の前にグイッと突き出され、腰を振る毎に細く振り合わされた禪の白い布が食い込む秘園の様子がマザマザと男達の目に映った。

お竜の女盛りを迎えた柔らかな双丘の間にも緋色の振り合わされた布が縦に通って腰を振る度にその狭間の様子が男達の目をそそった。

暁美の形の良い重そうな大きなヒップの間にも濃いピンク色の禪が食い込み男達の目を釘付けにした。

屈辱の尻振りダンスを元の義兄弟の男達に見せなければならぬと云う憤怒と屈辱感に顔を歪め唇を噛みしめて耐えていた女達であったが、音楽に併せて激しく腰を振る間にザラザラする木綿の布地が秘所を意地悪く擦り上げ、不可思議な陶酔感の様な物呼び覚まし始めていた。

股間に固く食い込む一筋通った、振りあわされた紐状の綿布により、女の敏感な神経が通る場所を刺激され続けて、女達の秘所は何時しか熱を帯びボツボツと充血を始めていた。

体全体に塗り込められたオイルが体温の上昇を受けて、艶々とした輝きを増し、その部分に狙いを定めたスポットライトの光を強く反射していた。

女達が熱に犯された様に艶めかしい蠢きを始めた事に気付いた黄原は、舞台の袖に待機していた男達に顎を勾って指示した。

男達は黄原の指示に肯いて、楽屋から布団を持ち出し奥の薄暗いステージに敷き始めた。

目の前に敷かれていく薄い布団を見詰めながら、女達は諦めた様にホッと息を吐いた。

「お前達！もう体は充分温まったろう？・・・さあ！その布団の上で互いに愛し合うんだ！」
いまや憑かれた様に淫靡な尻振りダンスを続ける女達に剛沢が冷たく命じた。

剛沢や獣の様にギラギラと目を輝かせる男達の怒声に追い立てられ、抵抗の無意味さを理解し諦めたように、ステージ上に敷かれた薄い布団の上に跪き、巴に向かい合って、臉を閉じてクナクナと頬を擦りつけ合い唇を吸いあった。

男達から強制されて口付けを繰り返す女達の頬に一筋の涙が伝わった。

「どや？お前達、まだアレが出来るか？」

村崎が好色な光を目に宿らせて両側に座る皐月と菖蒲に目を向けた。

「ええ、もちろん出来ますよ！」

と、淫靡に唇を歪めると、姉妹は何のてらいも無く、周囲に男達が居るのも気にならないのか、着物の前を大きくはだけて両方の肩を露出させると、着ていた着物から両手を抜き出して、グイッと着物を下に押し下げた。

上半身諸肌脱ぎになった肥満した姉妹の白い大きな乳房が丸見えになった。

次に、姉妹は腰を屈めて、村崎の左右から袴を弛めて、優しく股間のモノを取り出すと、互いに交互に口に含め合った。

村崎の息子が大きく育ったのを見て、二人は左右からその大きく垂れた乳房を両手で抱え上げ、村崎の肉茎を取り囲む様に揉み始めた。

「これや！これやで！お前達姉妹の売り物のダブルパイズリや！」

二人の豊かな乳房に挟まれて撫でられる気持ちの良さに、目はステージの方に向けながら大きな声を上げた。

一方、ステージの上では、スポットライトで明るく照らし上げられた3人の美女が繰り返すレズビアンショーに男達が声を潜めて見詰めた。

向かい合う二人で唇を会わせて深く舌を吸い合う間、もう一人が抑えが効かないように口吻し合う二人の頬に頬ずりを繰り返したり、また3人で同時に舌を前に突き出して互いの舌を絡め合ったりした。

そして、女同士の口吻で愛を確かめ合い気分が高揚してきたのか、互いに胸を押し付け合い乳首を絡め合った。

今や三人の美女達は、本妻と愛人と娘という禁断の垣根を超越して、レズの快感に自らを墜とし込む事により、今の惨めな境遇を忘れ去ることを願うかのように積極的に柔肌を擦り合わせるのであった。

両手が自由であれば、銀子から教えられたレズビアンのテクニックで互いの乳房を揉み立て、秘所を愛撫しあったところであろうが、両手を高手小手に縛り上げられていたためぎこちなく上体を寄せ合い乳房を擦り併せるだけしか出来なかったが、逆にそのぎこちない動きが見

守る男達には扇情的に映り劣情を催させるのであった。

後ろ手に縛り上げた麻縄で締め上げられツンと前に突き出した乳房を絡め合う姿は何とも云えぬ色香を醸し出していた。

上半身をクネクネと動かす度に、股間に硬く禪を食い込ませた女達の尻が妖しく蠢いた。

日頃の肉欲に狂った残酷な男達と違って、唯一心を許して縋ることの出来る女同士の優しい肌を触れ合わせる内に、何時しか体内深くから巻き上がる性感にくるまれた女達が、男達の目の前であることも忘れた様に、頬を紅潮させ甘い呻き声を上げるようになっていた。

その女達の熱い艶技を男達が好色な目付きで見守った。

「どうだ？お前達、だいぶ気分が乗ってきたんじゃないか？」

黄原がニヤニヤと薄笑いを浮かべながら、ステージの女達に声を掛けた。

絶望的な状況を忘れようとするかの様に、女同士での肉愛に忘我の境地に浸っていた所で、蛇蝎の如く嫌っている黄原から突然声を掛けられ、いきなり冷水を浴びせられた様に、ビクッとして女達が動きを止めた。

「だけど、後ろ手に縛られたままでは、最後まで行くことは出来ないだろう？・・・どうだ？これを取り付けて貰って、最後まで行きたいんじゃないか？」

と、女達に見せびらかすように、大きな黒光りする双頭の張り型を驚掴みにして突き出した。

その大きさに観客席からホウッと溜息が漏れた。

晴江が恨めしそうに潤んだ瞳でそれを見つめていた。

「先ず、これを取り付けられる程、其処が濡れているか確かめて貰え・・・」

黄原が3人の女をステージから下ろして、村崎のテーブルの前に立たせた。

「おうおう！これはグッショリや無いか！」

村崎が三人の女の股間を^{へそ}挟む様に通る六尺禪の様子をギラギラする眼で見詰め、秘所を隠す布切れを掌で触り、ジットリと濡れている様子確かめながら嬉しそうに声を上げた。

「ちょっと！ちょっと！今まで目高組の大姐で御座いと、偉そうに気取っていたのに、女同士のまぐ合いで其処をそんなに濡らして恥ずかしく無いの！？」

「貴女たち組に居た時から親子や妾の女同士でそんな風楽しんでいたんじゃないの？」

村崎の両側に陣取った、まるで女の相撲取りの様に上半身剥き出して、ふくよかな乳房を露出したままの皐月と菖蒲が、水に浸したように黒々と染みを作る股間の禪を見詰めながらゲラゲラ笑い声を上げた。

今まで自分達が生き血を吸うように扱って来た、元の下等な娼婦姉妹から蔑むような声を掛けられ、首を項垂れ悔しそうに唇を噛みしめた。

「これはこれは形と云い大きさと云いまるで昨晚の剛沢のモノのようやな？」

村崎が黄原の手にしていた双頭の張り型を受け取り、その鰓の張った大きな黒々としたシリコンゴムで出来た張り型に目を奪われた様子であった。

「良く分かりましたね！実は剛沢のモノを型取りして作った張り型なんですよ・・・」

「おお！やっぱりそやったか！」

村崎が、浮き出した血管まで忠実に複製したその大きな黒い樹脂製の張り型を繁々と見詰めながら笑い声を上げた。

「何時までもそんな男みたいな下穿きを身に着けていたら女同士で愛し合うことも出来ないだろう？・・・其処にいる菖蒲姐さんと皐月姐さんをお願いして禪を外して、取り付けて貰え！」
これまで冷たく扱って来た女達によって自分達の恥ずかしい姿を晒させようとする黄原の冷酷な命令に、堪え切れないように啜り泣きしながら俯いた。

何時までも皐月達にお願いしない女達に痺れを切らしたように、晴江の尻を思い切り抓り上げた。

この男達に抵抗することの無駄を知っている晴江は、断崖から身を投げる思いで、啜り上げながら目の前の皐月に哀しい哀願を始めた。

「・・・お願いします・・・皐月さん、晴江の・・・腰の物を取って・・・下さい・・・」

「まるでお漏らししたみたいになんかに股の間をグッシュヨリと濡らしちゃって、気持ち悪くて仕方無いんでしょう？でも両手を後ろ手に縛り上げられているから自分で脱ぐことが出来ないのね？・・・良いわ！昔散々お世話になった大姐のお願いだもの、喜んで取らせて頂くわ！」
と、満面に笑みを浮かべて、羞恥に咽び泣く晴江の顔を見詰めながら喜々として硬く縛り付けられていた六尺禪を外して行くのであった。

お竜と暁美も自分の禪を脱がして欲しいと強制されて言われたので、村崎と菖蒲が嬉しそうに暁美とお竜の腰にまいたサラシの布を解いていった。

フンフンと鼻歌を歌いながら禪を弛めていって、ハラリと一反の布が晴江の股間から落下した。

その薄いサラシの布で被われていた股間の佇まいが目の前にハッキリと露出して、皐月が大きな声で笑い出した。

「あら！晴江姐さん！あなたここの毛が無いの？」

「お竜姐さんも毛が無いわよ！」

お竜の褌を外し終えた菖蒲も可笑しくて堪らないと云う様な素振りで口を手で隠しながら笑い声を上げた。

「あら、嫌だ！ウチの娼婦達^{おすめ}だってここに毛のない娘なんていないわよ！」

「でも、お陰でここの様子が良く見えて良いわね！」

肉付きの良い股間に形作られたクッキリとした谷間に目を寄せながら堪え切れないと云うように大きな笑い声を上げた。

暁美も股間のモノを取られて、隠す物の無い亀裂をマザマザと晒していた。

「流石に大姐の貫禄ね！ここの割れ目もクッキリ大きくて！隠し毛が無いから良く見えるわよ！」

皐月が晴江のその部分の様子を目を見開いて眺めながら大声を上げた。

これまで粗末に扱って来た組の中の最下層の女に自分の秘所を見詰められる屈辱感に、思わず唇をグッと噛みしめた。

次に、剥き出しになった晴江の秘所を左右に捲り上げ、その襞の奥を検分する様に眺めた皐月が突然ゲラゲラと笑い出した。

「それにしても晴江姐さん、初めて見せて貰ったけど、貴女随分と立派なクリを持っていちゃるわね！男顔負けじゃないの？流石は女親分の貫禄ね！」

皐月の言葉のいたぶりに苦しげに眉根に皺を寄せて固く目を閉じると堪らず顔を背ける晴江であった。

「ああ・・・止めて下さい！」

晴江が堪え切れないようにクネクネと腰を動かした。

「何を言っているの？私たちは遣り手なんだよ！売り物の女の子のここの具合を何時も調べて、その日のコンディションを把握しておくのも私たちの仕事なんだからね！・・・貴女たちも今は大亜門戸会のお抱え娼婦なんだから遣り手として調べさせて貰うわよ！」

右手の指を器用に股間に這わせ、晴江の秘肉を押し開き、その奥の柔らかな襞を押し広げながら、嬉しそうに皐月が声を上げた。

「まあ、ビショビショじゃない！女同士でオッパイこねくり合って、そんなに良かったのかい？全くスケベな女達だね・・・ほら！もっと脚を広げて腰を前に突き出すんだよ！」

右手で股間をまさぐりながら左手で尻をピシヤリと叩いて命じた。

この間まで暴力と恐怖で支配していた、お抱えの売春婦上がりの遣り手から股間を調べられる屈辱に唇を噛みしめながら言われた通りに腰を突き出した。

両手を大腿に絡め、更に大きく押し開くと、顔を押し広げた股間に押し当て、その部分の匂いを嗅ぐ様な仕草をしたり、柔肉を押し広げてその内側の様子を繁々と観察するような仕草をした。

「香水を振り掛けて其処の臭いを消している様だけど、仕事柄私たちは香水越しにオ●●●●●の素の臭いが解るのさ！女も歳を取ると段々と煮詰まって来て、ここの匂いも強くなって行くもんだけど、晴江姐さんのマ●●●●●は若い女みたいに良い匂いだするじゃないか！」

「お竜姐さんも良い匂いがするよ！こいつは本当に娼婦向きの身体だねえ！賭場で賽子振っているより、盆莫蔭の上に大股開いて客に見せてやったり、男と絡んでいた方が組としても実入りが良かったんじゃないかねえ・・・」

菖蒲もお竜のその部分に顔を押し付ける様に観察したり、指を匍わせて悲鳴を上げさせたりして、粘っこく検分しながら笑い声を上げた。

女達は、薄汚い売春婦とこれまで軽蔑して来た女から、股間を検められると云う屈辱と羞恥に涙に咽びながら半身を揉んで身悶え続けた。

「お豆が大きくて飛び出た女は兎角お豆の感度が鈍いものだけど、どうしてどうして中々敏感な様じゃ無いか？」

皐月の良く動く指先で外に向かって突き出した陰核を弄られる度に晴江の身体がビクンビクンと反応した。

突然、皐月が肉襞を大きく左右に押し広げ、その中から現れた肉洞に指を差し入れた。

「アアッ！イヤ！」

突然指を深く秘所の奥深くに突き入れられて腰をくねらせながら悲鳴を上げた。

その隣ではお竜が同じように悲鳴を上げて腰をくねらせていた。

村崎がニコニコと笑みを浮かべながら二人の様子を覗っていた。

「イヤじゃないでしょ！ほら指を締めてごらん！」

皐月から三本の指を挿入された晴江が、屈辱に歯を食いしばって言われるままに締め上げた。

「中々良い絞め具合じゃないか・・・流石は銀子姐さんに鍛えられただけの事は在るわね・・・」と、晴江の其処の力に感心したように声を上げた。

そして、指を抜き取るとその指を口に含んで愛液の味覚を確かめたり、豊かに溢れ出す樹液の流れを視察したり、愛液を垂れ流す股間に鼻を押し付けてその部分の臭いを嗅いだりした。そして、そのまま舌先を延ばすと、包皮を剥いで屹立している陰核をゾロリと嘗め上げた。ざらりとした舌の表面の気持ちの悪い感触にヒッ！と悲鳴を上げて腰を悶えさせた。

その身悶えぶりに、感度良好とでも云う様にニヤッと笑いを浮かべると、

「流石は銀子姐さんに鍛えられたと云うだけあって、良いお道具をお持ちじゃないか？ウチの商品でもこんな立派な持ち物の娘は居ないよ！全くヤクザの女親分にしておくには惜しかったね！もっと早く売り出しておけば、目高組としてもたんと稼げたものを！」

と、甲高く笑いながら声を上げた。

一方では、菖蒲がお竜の乳房をその重さを量る様に、下から両手で持ち上げたり、両掌で揉みしだいて、その柔らかさや、しっとりとした脂肪の着き具合を熱心に確認していた。

かつては男に身を売るしか取り柄の無い公衆便所の様な薄汚い娼婦と軽蔑していた女から、後ろ手に縛られ無抵抗の身を好き勝手に検められる屈辱に、目に涙を浮かべて啜り泣くのであった。

突然菖蒲から後ろの門を割って指を突き立てられ、暁美がヒッと悲鳴を上げてビクッと身体を硬化させた。

その暁美の反射的な動きに、「あんた、まだ此処の良さが分かって無い様だね？」

と、中指を深々と暁美の肛口に突き立てたまま呟く様に言った。

「まあ、その内慣れて来て、自分からお尻の穴を掘って欲しいーって、男におねだりする様になるさ・・・」

女の指を直腸に突き立てられ、内部からまさぐられる気持ち悪さに顔を蹙めて堪える暁美に声を掛けた。

ほら！中に入れた指を思い切り喰い絞めてごらんーと、命令されるままに必死の思いで菊門の筋肉を収縮させる暁美に、

「なかなか良い絞め具合じゃないか！こりゃモノに成りそうだよ。」

と、指を暁美の肛門に突き立てた儘、可笑しそうに声を掛けるのであった。

「さて、お待ち遠様。いよいよ、お道具を取り付けて上げようかね。」

巨大な双頭の張り型を手に皐月が嬉しそうに声を上げた。

生身の剛沢の隆起したモノから型取りして、二つを基部で接合したという、生々しい双頭の淫具を手にしたまま淫靡な笑みをたたえて繁々と見詰めた。

黒光りする樹脂製の張り型を手にした自分の方を冷酷な目で見つめる皐月に晴江は怯えた表情を浮かべた。

「いい歳して何を小娘みたいに震えているのさ？こんな事何時もお客とやっている事じゃないか！気楽な気持ちで腹の中に呑み込めば良いんだよ！」

太い張り型を握り締めると一方の端を飾り毛の無い剥き出しの秘裂に押し当てた。

いよいよこれから馬鹿にしていた元お抱え娼婦に、女芯を貫かれるのだと思うと、アッと悲鳴を上げて腰を引いた。

「お前たち馬鹿なんじゃないかい？娼婦がこれしきの事で一々悲鳴を上げていてどうすんだい！」

と、これまでの恨みを返す様に晴江の頬に激しく平手打ちを食らわせた。

皐月の剣幕に恐れを抱いたのか目に涙を浮かべて身じろぎを止めた。

すっかりおとなしくなった晴江に気を良くしたように、張り型の先端を割れ目に沿って上下させ股間から滲み出た粘液を亀頭部分に塗りこめて行った。

十分に潤滑したと見た皐月は残忍な目で晴江の方を見ると張り型を握る手に力を込めた。

「ああっ・・・大き過ぎて痛いわ・・・」

皐月の手で巨大な硬い張り型をズブズブと肉の亀裂の中に埋め込まれて行きながら、むずかる様に腰をくねらせた。

「嘘おしゃい！毎日スケベ客や剛沢親分に押し込まれてこんな物、どうってこと無いはずよ！・・・ほうら！スケベな涎を垂れ流しながら、どんどんと嬉しそうに呑み込んで行くじゃない？」

晴江の股間の抵抗を楽しむ様に更に力を込めて埋め込んで行きながら楽しそうに声を上げた。

「ああーっ！イヤ！」

晴江が、堪えられない様に腰をくねらせた。

「ほら、そう言っている内にズッポリと奥まで入ったわよ！・・・ほほほ！剛沢親分の立派なモノが股間からピンと前に突き出して、・・・まるで男みたいね！」

憎みても余りある剛沢から型取りしたものは、華肉を精一杯押し広げ、一部の隙もなく晴江の体内に埋め込まれていた。

そして、もう片端の剛沢のモノを模した黒々とした逸物を股間から突き出した晴江の姿は、小柄の裸身から巨大な男のモノを突き出し、まるでエロ漫画のふたなり女の誇張された姿の様に滑稽に映り、見守る男達の笑いを誘った。

「それじゃ最初は、大姐とお竜姐さんの白白ショーだ！」

黄原に声を掛けられ、二人は若い衆に手を引かれてステージの方に押し上げられて行った。

「貴女のお母さんとお竜姐さんの二人で楽しんでいる間、お嬢ちゃんはこちらに残って見学よ！」

ステージに押し上げられた晴江達のショーの準備が整えられている間に、興の乗った村崎が皐月の着物の前を押し割って股間に指を伸ばした。

村崎の太い指で股間をまさぐられて擦ったように皐月が身を揉んだが、そんな村崎の指の動きに嫌悪する様子は無く、指先が動きやすい様に股を広げた。

皐月の股間をまさぐり続ける村崎が怪訝そうな顔をした。

そして、その疑念を確かめる様に今度は、菖蒲の股間に手を差し入れた。

「なんや？お前ら！毛が生えとるや無いか？」

「当たり前ですよ、親分！あの頃は親分の性癖このみに合わせてツルツルに剃り上げていたんですよ！」

「そうか・・・生まれ付き毛が無いのかと思とった・・・」

「そんなことある訳無いじゃないですか！」

少しガッカリした様子の村崎を面白そうに見詰めながら、姉妹が笑い声を上げた。

「それにしても、あの頃偉そうにふんぞり返っていた大姐達が、まるであの頃の私たちの様に大事な所をツルツルの剃りマンにされて、オンナを丸出しにして舞台の上で恥かき芸を演じるなんて、愉快で仕方が在りませんよ！」

と、ステージの上で剃毛されて隠す物の無い秘所を丸出しにした晴江達を見詰めながら、大きな声で笑い続けた。

「あの頃は、今の暁美みたいに肌にも張りがあって顔もアソコもツルピカで、おぼこみたいやったけど、暫く見ん内に、えらい婆になったな・・・」

二人の顔を交互に眺めながら村崎が愉快そうに笑い声を上げた。

「も一、嫌な親分！」

村崎から歳の事をからかわれて二人が頬を膨らませた。

「ところで、貴女、^{あなた}村崎親分からここの穴を掘られたことある？」

晴江やお竜と引き離されて一人村崎の前に残された暁美の丸い尻を撫でながら皐月が尋ねた。遣り手婆の姿に戻った女から淫靡な微笑みを浴びながらその部分を嫌らしい手付きで撫でられ、質問されて思わず暁美が頭を振った。

「そう？まだなの？じゃ親分をお願いして掘って貰いなさい。きっと病み付きになるわよ！」

「見たところ、よっぽど銀子さんに鍛えられたのか、美味しそうなお尻の穴をしているし、きっと素質は在りそうだよ！」

菖蒲が暁美の菊花の皺をなぞる様に撫でたり、鼻を近づけてその部分の匂いを嗅ぐ様な仕草をしながら言った。

これまで幾多の客から面白半分は無理矢理肛門を貫かれ、快感とはほど遠い屈辱感と痛みと嫌悪感しか感じたことが無い暁美であったが、昨晚の母親と村崎の肛交の姿を思い出し、村崎に背後から突き立てられる度に、狂った様に身悶えていた母親の姿が蘇り、自分もそのような浅ましい姿を晒すことになるのかと、ゾッと恐怖感が込み上げ頭を振った。

舞台の上では、三下達により天井から降りて来た縄に、二人の後ろ手の縄が繋がれ、立位のまま二人の裸女が対面する形で準備が調った。

観客席ではこれから始まる美熟女同士のショーへの期待でシンと静まりかえった。

お竜の下腹を抉るであろう、晴江の股間から突き出した、黒々とした男のモノに男達の視線が集中した。

黄原が早く始めろと言う様に目で合図を送った。

黄原に急き立てられ、仕方無くお竜の頬に頬ずりしながら、「アア・・・お竜、許しておくれ・・・」と呟いた。

天井から垂れた縄に縛り付けられ、不自由な姿勢で、上半身をくねらせ、乳房を触れ合わせながら、「アア・・・姐さん・・・」と、甘い声を上げた。

そして、そのまま唇を重ね合い、深く舌を吸い上げ始めた二人の女に観衆が熱い視線を送った。

全身に鮮やかな刺青を入れた女と肩から上腕に掛けて極彩色の刺青を入れた女の二人の美女の長い口吻を男達は息を呑んで見詰めた。

口づけを交わし合いながら、二人は互いの乳房を絡め合わせ、柔らかな腹を擦れ合わせた。

二人の乳首が固く凝って行く様子が在り在りと映った。

かつての本妻と二号という恩讐を越えて、今や互いに縋り合わなければ生きて行けない女同士の真剣な愛の交接のためか、興奮して、雪の様に白かった肌が鮮やかなピンク色に上気して行った。

晴江の股間から突き出したスポットライトを反射して鈍く輝る隆々としたモノが肉欲を求めて蠢くようにピクピクと動いていた。

「ほら！村崎親分にお尻の穴の気持ち良さを教えて下さいって、お願いするのよ！」

ステージの方にネットリとした視線を向ける村崎の前に引き据えられた全裸の暁美に向かって皐月が声を掛けた。

皐月に命じられるまま、消え入りそうな小さな声で涙ぐみながら、自分の尻穴を犯して欲しいと哀願させられる暁美であった。

昨晩は母親の後ろの秘宝を味わうだけで時間が無くなり、まだ娘の方は犯していなかった村崎は、今この場で娘の秘孔も味わうことに欲望が込み上げ、怯えて小さく蹲る暁美を見詰めながら、醜い笑みを浮かべた。

「ほら、自分のお尻の穴を突いて貰う有り難い珍棒様に感謝の気持ちを込めながらおしゃぶりするのよ！」

「親分のは、本当に鉄みたいに硬いからしっかりとしゃぶって濡らしておかないと辛いわよ！」

菖蒲や皐月が村崎の股間から突き出した醜怪なモノに手を添えながら、暁美に命じた。

命じられるままに唇を大きく開いて、村崎のモノを口内に含んでいった。

「ああ・・・ええ気持ちや！」

暁美の絶妙な舌技に村崎が深く腰掛けたソファに背を反らせて呟き声を上げた。

そんな村崎の劣情を掻き立てる様に、時々前に垂れて来た長い髪を首をサッと振って後ろになびかせ、再び隆起したモノを口に含んで行くのであった。

暁美の熱のこもった愛技を見詰めながら、村崎の嗜好を熟知している双子の姉妹が目配せをし合った。

村崎の前に腰を降ろした暁美の下腹と大腿に手を掛けると、村崎のモノを口に咥えさせたまま、暁美の身体を持ち上げようとした。

突然の二人の年増女の行為に驚いて、慌てて村崎のモノから口を離した暁美の頭を村崎の股

間にグイッと押し付けて、村崎のモノを咥えたままの口を起点として時計回りに大きく村崎の腹の上で暁美の身体を半回転させた。

ソファに深々と腰を降ろす村崎の股間に顔を埋めたまま尻を高くもたげる姿勢を取らされた。今や大きく広げられた暁美の股間が村崎の目の前にあった。

頭を下にして下腹を上にした暁美がずり落ちない様に二人の女が両側から暁美の身体を支えた。

村崎の嗜好に応えるため麻縄で後手に縛り上げられた暁美は二人の女から両側から支えられ、村崎の頭を挟む様に太股を広げるしか無かった。

二人の遣り手姉妹の機転に、嬉しそうな笑顔を作ると、目の前に供された若い女の秘奥を眺めた。

「おうおう・・・これは美味しそうな尻の穴や・・・」

好色な笑みを浮かべて直ぐ目の前の暁美のさらけ出された肛門に指を添えた。

村崎のモノを口腔で愛撫しながら、村崎の指が肛門を割って侵入して来た時、ウッ！と声を上げた。

「これはこれは極上な尻穴や！・・・よっぽど銀子に見堪えられたんやな・・・暖かくて、湿っていて、・・・よう締め付けてるわ・・・」

根元まで突き立てた中指を締め付ける暁美の弾力ある肛口の感触を楽しみながら声を上げた。やがて、人差し指も添えて二本の指先で直腸の内部をまさぐり始めた。

まるで悪魔掛かった様な村崎の巧みな指先の動きに、普段客から乱暴にアヌスを責められた経験しか無く、その時の激しい痛みに肛門性交に嫌悪感を抱いていた暁美の心を慰撫する様に妖しげな感触が内部から伝わって来た。

まるで楽器を演奏する様な村崎の巧みな指の動きに肛口周りに散りばめられて神経を掻き撫でられ、不潔な器官を弄ばれると云う嫌悪感は何時しか拭い去られ、村崎の隆起したモノを咥える口から甘い溜息が漏れる様になっていた。

じつとりと湿り始めた目の前の亀裂を見詰めながら、この娘も漸く後ろの穴の喜びが解り始めた様やな、とニンマリを微笑んだ。

更に親指を追加して三本の指で、柔らかく解きほぐされた肛門を押し広げた。

プーンと周囲に直腸内の独特な臭いが立ち込め、暁美の身体を支える皐月と菖蒲が顔を蹙めた。

「ああー、ええ臭いや！」

そんな二人の反応にも気に掛けず、村崎は大きく広げられたままの肛口に鼻を押し当てる様にして、深く息を吸い込んで暁美の身体の奥底から立ち昇る香りを楽しんでいた。

そして、暁美の股間に顔を押し付けたまま、舌を思い切り前に突き出すと、指を引き抜いた肛門の回りを舌で舐め始めた。

不潔な開孔部をざらつく舌で舐め上げられる驚きと羞恥に村崎のモノを口に含んだまま暁美の身体が硬化した。

そんな暁美の反応を楽しむ様に丹念に肛門の周りの皺に沿って舌と唇による愛撫を繰り返した後、突然舌先を細く窄めて、柔らかく開いた肛口内にズルリと滑り込ませた。

村崎の突然の行為に暁美の身体がビクリと引き攣った。

暁美の狼狽を無視して、長く延ばした舌先で暁美の腸内を丹念に舐め上げ、その味覚を味わった。

暁美の股間にピッタリと顔を押し当て、直腸内を舐め回す村崎に、両側に陣取る皐月と菖蒲は呆れた様に、「まあ！親分！そんな所が美味しいんですか？」と、声を掛けた。

二人の熟女の呆れた声を無視する様に、「ああ・・・ええ味や！儂は若い^{おなご}娘のここを舐めるのが大好きなんや！」と、嬉しそうに声を上げるのだった。

ステージの上では女同士の愛欲行為に上気して、しっとり汗を浮かべ、肌を赤く染めた二人の女が、最後の肉と肉との交接を遂げる所であった。

「お竜・・・お願い、晴江の物になって・・・」

女同士の激しい愛に巻き上げられ、全てを忘れた様にのめり込む晴江が、頬刷り会うお竜の耳元で早い息を吐きながら擦れた声を上げた。

「ああ・・・姐さん・・・」

女同士の愛の最後の段階を迎え、ゾクッとする様な快美感が背筋に走り、お竜が甘い声を上げた。

天井から麻縄で吊り下げられた不自由な姿勢で、晴江が股間のモノでお竜の股の間を貫こうとした。

しかし、両手を後ろ手に縛り上げられているため、うまくお竜の体内に挿入することが出来ず、互いに危なっかしい姿勢で腰を蠢き合わせた。

「お竜、お願い・・・もう少し脚を開いて」

お竜を貫くことが出来ず、焦れた様に晴江が声を上げた。

「そうだ！そうだ！もっとガバッと股を広げろ！」

小柄の晴江と大柄なお竜が天井から縄に吊り下げられたまま、腰を振り合い、相手の女芯に張り型を突き立てよう、あるいは受け入れようとする妖しげな動きに観客席から大きな笑い声が上がった。

晴江の動きに協力する様にお竜も腰を蠢かせてその先端が自分の秘裂の奥を突く様に誘った。

「ここです！ここを思い切り突き上げておくんなさい！」

興奮してハアハアと荒い息を吐きながら鼻に掛かった声を上げた。

大きく広げられたお竜の股間の中央に、剛沢から模^{かたど}られた黒々をした物がピッタリと押し当てられた。

太い鰓の張った亀頭部で、お竜の肉襷を押し分ける様に左右にくねらすと、その奥の肉洞の入り口にそれを押し付け、腰にグイッと力を込めた。

「お竜、お願い、右足を上げて！」

晴江に請われるままに、右足を上げて片脚立ちとなり、そのまま上げた脚を晴江の腰に絡めた。

お竜の股間が観衆の前にパツクリと開く形となり、スポットライトに照らし上げられて、先端部分を呑み込んだ秘所の様子が在り在りと浮かんだ。

そのまま晴江が腰に力を入れて行っただけで、巨大な亀頭部分がお竜の肉体の中に姿を消し、太い竿がズブズブと埋め込まれて行く様子が見詰める男達の目に映った。

太くて長い張り型がお竜の体内深く呑み込まれ、子宮口に当たって止まった。

コツンと当たる様な微かな衝撃を受けて、「お竜、入ったのかい？」とお竜の様子を窺いながら聞いた。

肉洞深く埋め込まれた巨大なモノの発する圧力を感じながら、眉根をキュッと寄せて唇を噛みしめながらお竜が肯いた。

両手を後手に縛り上げられ、上体を天井から吊り下げられる不自由な姿勢で自ら下半身を蠢かせて剛沢の逸物を鑄型にした性具を胎内深く受け入れた訳ではあるが、改めてその大きさを思い知らされ、ズキズキするような刺激が膣内から込み上げ、その淫靡な感触に辛そうに眉根を蹙め切なように頭を振りたてた。

二人とも上気して汗塗れになりながら、深々と埋め込まれたモノの感触を確かめる様に互いに上体を預け合って肩で息を吐き合った。

「お見事！お見事！二人とも立ったまま俺のモノを収め合ったじゃないか！」

剛沢が立ち上がって上機嫌で手を叩いた。

「さあ、次は俺のモノを仲立ちとして腰を振り合うんだ！」

剛沢に命じられて最初は静かに、そして段々と激しく腰を振り合う二人の熟女であった。

「どや？見てみい！お前の母親とお竜は、見事に立ったまま剛沢のモンを身体ん中に納めたや無いか。・・お前の此処ん中にも儂のち■■■■んが入っているのが判るか？」

ステージの上で晴江とお竜が汗塗れになって剛沢から模^{かたど}ったモノに苦闘している間に、村崎の前に後手に縛られた身体を胸と顔で支え、高く尻を擡げた姿勢を取らされた暁美の後門を押し開いて、村崎の肉茎が根元まで腸内に収まっていた。

老練で肛門性交に長けた村崎は最初から力尽くで暁美の体内に突き立てる事はせず、暁美の反応を楽しむかの様に僅かずつ開いた菊花の内部に押し入れ、亀頭部の先端で鋭い締め付けを楽しんでいた。

そんな村崎の老獪な責めに根負けした様に、その部分から妖しげな感触が押さえようにも込み上げて来た暁美は、股間をビショビショに濡らしながら、自ら腰を蠢かして村崎のモノを奥深く迎え入れたのであった。

村崎のモノを根元まで咥え込んだ息が詰まる様な最初の苦痛は薄れ、今は村崎の肉塊が醸し出す、痺れる様な妖しげな感覚を腸壁の薄い粘膜を通して感じている暁美であった。

これまで何千人もの女を抱いて来たと豪語する村崎の陰茎には、まるでその苦渋と快感の混じり合った肉汁を吸い上げられて来た女達の怨念が肉塊に充満しているかと思わせ、新たに犠牲となった女の胎内にその呪いの渦を一機に注ぎ込ませるかの様に、背筋にゾクゾクする妖しげな快美感を与えるのであった。

「どう？親分のモノは凄いでしょ？」

両側に陣取った皐月と菖蒲が眉をグッと寄せ下唇を噛みしめる暁美の様子に気付いて、昔村崎の肉棒を味合わされた記憶が蘇り、声を掛けて来た。

そして、村崎が腰を動かし始めたのに併せる様に、手を差し入れて乳房を揉んだり背筋や太股を撫でたり、暁美の性感帯を探る様に優しく撫で始めた。

じんじんとする不思議な快美感を振りまく様な村崎の腰の動きに併せて左右から二人の遣り手に性感を煽られ、暁美が堪えられない様身悶えて甘い声を上げた。

堪らず目を閉じると、昨晚の村崎から後門を責め立てられ狂った様に悶絶していた母親の乱れた姿が脳裏に浮かんだ。

ステージの上では晴江とお竜が剛沢の陰茎を模したモノを体内に収め、互いに腰を振り合い甘い声を上げ続けていた。

しかし、天井から吊された麻縄に繋ぎ止められた不自由な立位の姿勢のため、十分に身体を蠢かすことが出来ず、そのもどかしい動きのため、なかなか最後まで行き着くことが出来ず身悶える様子が見守る男達の目に在り在りと映った。

「どうだ？お前達、折角立派なモノを腹の中に納めても、天井から吊り下げられたままでは身動きが充分に出来ず、逝きたくても逝けないのだろう？」

腰を小刻みに激しく振り立てながらも、イクにイケ無いもどかしさに身悶えする二人の女に黄原が声を掛けた。

晴江もお竜もハアハアと息を吐き、全身汗塗れになっていた。

もどかしく尻を振り合い股間をぶつけ合いながら、苦悶する二人にからかいの言葉を投げ付ける黄原に、お竜がうっすらと唇を半開きにしたまま、恨めしそうな目で黄原の方に目をやった。

そんなお竜の視線に気付いた晴江は、

「お竜、そんな男の事は気にせず、私たちだけで楽しみましょう・・・」と、黄原の投げ付ける言葉や周囲の男達の刺すような視線が気になり、そして何よりも親分を奪った女と奪われた女という心のわだかまりがいまだに尾を引き、女同士の性愛に没入できずにいるお竜に声をそっと掛けた。

晴江にしてみれば、元の僚友の淫靡な視線の中で恥ずかしい行為を目撃される羞恥から逃れるには、これまでの関係を一切忘れて、この女同士の愛の中に全てを投げ込み、現実を忘れさせるより無いと考えていたのだった。

そんな晴江の意志に気付いたのか、お竜も「判りました・・・晴江姐さん・・・」と、呟いた。

「嫌、晴江姐さんじゃなくて、晴江と呼んで・・・」

「ああ・・・晴江・・・」

二人は目と目を見交わせて再び熱い接吻を交わした。

女同士の熱の籠もった性行為に全身を没入させた晴江とお竜の全身からは溢れるような色香が漂い出し、見詰める男達を悄然とさせた。

そして、男達の視線も溜息も意識に入らなくなった二人は、炎の様に燃えさかった身体を激しくぶつけ合い、濃密に擦り合いながら激しい吐息を吐き続けた。

再び激しく尻を振り始めた二人の女に、その全身から発する色香に当てられた様に男達が熱い視線を注ぎ込み、卑猥な声を浴びせ続けたが、火の様に全身を燃やし始めた二人の女にはそんな男達の様子も最早気にならないようであった。

「ああ・・・お竜、晴江は、とても良い気持ちよ・・・このまま二人で昇り詰めたいわ・・・」まるで熱に浮かされた様に全身を紅潮させ、腰を蠢かせながらお竜の耳元で囁くように言った。

二人の交差し合う股間は互いの汗か秘裂から溢れ出す淫液かにより、ヌラヌラと濡れ光り、狭い肉洞を淫靡な筒具が出入りする度に妖しげな音を上げていた。

さつきまで大声で卑猥な言葉を投げかけていた観衆も今は咳き一つたてず、二人の美熟女の秘所が奏でる妙なる音に聞き入り、一途に燃え上がり女同士の愛に没入する二人を目を皿の様にして見入っていた。

「ああ・・・晴江・・・もうお竜は逝きそう・・・」

女同士の愛に完全に没入している二人は、周囲の事など忘れ果て、自分達の肉体をその部分で繋ぎ止める一対の陰具に全てを託し、激しく腰を振り合わせていた。

「駄目、イク時は一緒よ・・・」

晴江はお竜に息を併せようと、股間に埋め込まれた筒具を強く噛みしめた。

その後何度か激しく下腹を打ち付け合った後、突然悲鳴の様な声が二人の口から発せられ、二人の腰の動きがピタリと止まった。

二人は身体を押し付け合う様に上体を密着させ、大腿をからませあったまま、互いの肩に載せ掛ける様に顔を埋めハアハアと荒い息を吐き続けた。

いまだ激しかった快感の余韻か、剛沢の物を模した双頭の張り型を胎内深く喰い絞めたまま、ときおり腰をピクピクと痙攣させ続けていた。

太い張り型により隙間無く閉ざされた陰孔では在ったが、そのピッチリと封鎖された二人の女陰の隙間から溢れ出た愛液は大腿を通して滴り流れ落ちていた。

二人の美熟女が立位のまま同時に絶頂に達する姿に、観衆は驚きの声を上げ、続けて手を叩いて歓声を上げた。

「おうおう！自分の母親やお竜と同時に逝ってしまうなんて、器用な娘や！」

村崎のモノを後ろに咥え込んだまま、まるで母親やお竜と同調するように、腰から背中にか

けて電撃を受けたように身体をブルッと震わせ硬直した暁美の様子を見ながら村崎が嬉しそうに笑い声を上げた。

いまだに肛門性交による絶頂感が続いているのか、ハアハアと早い息を吐きながら、腸管内に納められた村崎の太いモノをビクビクと締め上げるので在った。

その絶頂の後産の様な下腹の動きに快美感を刺激され、ウツトリとした笑みを口の端に浮かべる村崎であった。

「お見事、お見事、お前達まるで干し柿みたいに軒から縄で吊されながら二人同時に器用に逝ったじゃないか！」

黄原が笑いながら手を叩いて二人に声を掛けた。

「だけど、激しい性交に慣れたお前達には、その程度の絶頂を味わっただけじゃ物足りないだろう？逆に火を点けられてもっともっとと、身体が疼いて仕方無いんじゃないか？」

立位に吊り上げられたまま、激しく身体を動かし合い、もう身体を動かすことも出来ない程体力を使い果たし、すっかり消耗しきった二人は、互いに身体を密着させることで支え合い、互いに相手の肩に顔を預け合いながら、背中で激しい息を吐いていたが、薄い意識の中で黄原の発する言葉を聞いてゾッとするような恐怖を感じた。

立位での女同士の激しい性交の末、すっかり体力も使い果してしまったのに、又新たな責めを加える心算^{つもり}じゃないのだろうか？—と。

怯えた目の色を浮かべてこちらを見詰める二人を無視して、

「お前達のために助っ人を呼んで置いたぜ・・・」

黄原が淫靡な笑みを浮かべながら呟いた。

そして、舞台の袖の方を振り向くと、中に向かって大きな声を上げた。

「ヘイ！ジミー、ジョニー、カモン！」

黄原の声につられる様にステージに向かうカーテンが開き、二人の黒人男性がステージにのそりと姿を現した。

その二人の黒人男は、身体に小さなパンツを身に着けただけの半裸姿で登場したので、まるでアメリカンフットボールの選手の様な逆三角形の厚い胸の筋肉や隆々とした大腿の筋肉等がスポットライトに照らし上げられていた。

身長は優に2メートル以上あり、小顔であったので、その九頭身の逞しい筋肉質の身体が一層引き立って見えた。

「紹介しよう！アメリカのポルノムービーの世界では有名な双子の黒人ポルノスター、ジミーとジョニーだ！二人は14.5インチのJーツインと呼ばれている」

黄原から紹介されて、二人は薄いパンツの生地越しにコンモリと盛り上がる股間のモノを自慢するかの様に、観客に向けて股を拡げて腰を突き出したので、観衆から喝采の拍手が湧いた。

「まあ、14.5インチ即ち37センチは営業上の誇張だとしても、優に13インチー33センチは充分にあるぜ！丁度折良く日本でポルノムービーの撮影が合ったので、間を見て来て貰ったんだ。」

流石の村崎も、こんな大男を見つけて来るとはーと、言うように呆れたような顔で剛沢の方を振り返った。

「プロフィールに書かれている身長7フィート6インチつまり約2メートル29センチは盛り過ぎとしても、2メートル10センチ以上は確実にあると思われ、ポルノ男優史上最長身で在ることは間違い無いでしょう。更に一卵性双生児として。」

黄原が、息を呑んで見つめる観衆に得意そうに説明した。

二人の黒人男はステージの中央に天井からロープで吊り下げられて、相対張り型で繋がったままのお竜と晴江の傍に立つと、黙って唯一身に着けていたパンツを脱ぎ捨てた。

その股間からダラリと垂れ下がったモノを目にして、男達はオオッと羨望の交じった驚きの声を上げ、男達に侍っていた女達からは、キャーッと悲鳴が上がった。

男達の股間のモノは優に30センチ以上はありそうで、まるでソーセージの様なその長い竿の部分の太さも5センチ近くはありそうであった。

黄原が、黒人ポルノスターにお竜と晴江の方を指差しながら小声で何やら告げた。

腰を屈めながら黄原の指示を聞いていた二人の男は、心得たとばかりニヤッと笑うと無言で天井から吊り下げられてままのお竜と晴江の方に歩を進めた。

この二人の黒人の巨人に抱かせようとする黄原の意図が判り、その様な巨大なモノに貫かれる恐怖に青ざめたお竜と晴江は、狼狽して思わず逃げだそうとしたが、剛沢のモノを模した相対張り型で連結されたままであり、更に天井から垂れ下がるロープで吊されたままであったので、逃げることも敵わず、ただ狼狽えて右に左にロープを揺らすだけであった。

互いの股間を一つに結合されたまま、恐怖に取り乱して互いに別々の方に逃げようと四本の脚をバタバタさせるステージ上の二人の女の様子に観客席の男女から笑い声が上がった。

そんな絶望的な足掻きを繰り返す二人の女の背後に立った二人の黒人男の股間のモノがムクムクと持ち上がり始め先端部分が徐々に上を向いて行った。

まるで軒から吊された太いソーセージの様であった黒々とした肉塊は、今は大蛇が鎌首を擡げる様に天井に向いていた。

そんなバタバタと恐怖に懊悩する女達の背後に迫ると、女達の身動きを制する様に大きな両手で腰を抱え込んだ。

突然熊の様に巨大な黒人男の手が尻に触れて、電気が流れた様にお竜が大きな悲鳴を上げた。男勝りで知られていたお竜の恐怖に打ちのめされた、身も世もない激しい悲鳴に、観客席から笑い声が起こり、盛んに野次が飛ばされた。

一方晴江の方も必死に尻を振って拒んだが、大男にガッシリと腰を掴まれてしまった。

二人の男は、女達の恐怖感に支配された激しい身悶えも無視して、相対張り型で結ばれたままの二人の女を軽々と持ち上げた。

そして、そのまま二人の女の後門に自らの巨大なモノの先端を宛がった。

男達の意図を理解した女達が、大声で泣き叫びながら必死に身悶えて抵抗を図った。

しかし、男達はそんな女達の抵抗を嘲笑う様に、高々と持ち上げた女達をゆっくりと下に降ろして行った。

菊の蕾の様に窄まっていた薄いセピア色の窓は、男達の陰茎によりピッタリと下から突き上げられ、砲弾の様な形状の先端部により徐々に押し広げられて行った。

前に剛沢の巨大なモノを埋め込まれたまま、更に後ろに太い黒人のモノを押し入れられる苦痛にお竜も晴江も宙に浮いた脚をバタバタさせ、眉根を蹙めて悲鳴を上げた。

地面に届かない両脚をバタバタさせて、涙を流して身悶えながら、二人の黒人男のモノを突き立てられる二人の女の激しく泣き叫ぶ様子に観客席から快哉の笑い声が上がった。

二人の女を宙に持ち上げていた力を不意に離したので、お竜も晴江もそのまま真下に落下し、双子の男のモノの亀頭部分が体内に姿を消した。

男の最も太い物が狭い入り口を通過する激痛に、二人の女の口から激しい悲鳴が上がった。

男のモノを受け入れ激痛に身悶えする二人に思わず観客席から冷酷な笑い声が上がった。

二人の黒人男はその長さを誇示する様にゆっくりとその長大な竿をズブズブと二人の女の腸内に収めて行った。

「ほれ、見てみい、お前の母親とお竜は黒人のあんな長いものを腹ん中に呑み込んで行きよ

るで！」

暁美の背後から腸内に突き立てたまま、村崎が感心した様な声を上げた。

後口による一度目の絶頂を経験し、全身にだるさを感じている暁美であったが、今はステージで母親とお竜が巨大な黒人ポルノスターに責められる壮絶な光景にブルブルと身体を震わせながら声も上げられず見入っていた。

そして母やお竜の肛門を割って侵入してくる黒人男の想像を絶する太くて長い陰茎が柔肉の中に埋没して行く状況が今の自分とシンクロするのか、腸管内に留められたまま、じわじわと硬度を増し始めた村崎の陰茎をグイグイと締め付けるのであった。

暁美の性感帯を左右から責め立てていた皐月と菖蒲の姉妹も、その手を休めて、今はステージの方に目が釘付けとなっていた。

暁美も村崎から肛門を責め立てられ懊悩する意識の中で黒人男に突き立てられる母親とお竜の様子を憑かれた様に見詰めていた。

「おうおう！そう言うとの間にととうあの長い竿を全部呑み込んでしまいよったで！」

村崎が感心した様に笑い声を上げた。

太い黒人の陰茎を根元まで完全に呑み込み、肛門を引き裂かれそうな恐怖の中で、晴江もお竜も歯を食いしばり全身を硬化させて男のモノを喰い絞めた。

その尻穴の強烈な締め付け具合に感激したかの様に、双子の黒人兄弟はワハッと笑い声を上げると右手を高く差し上げ、二人の女を間に挟んだままハイタッチした。

下腹から強い圧力を受けて胃の中の物を吐き出しそうな衝撃を受けながら、二人の女は脂汗を浮かべながら身悶えていた。

村崎に後ろから突き立てられる妖しげな感触に身悶えながらも、黒人男の長大なモノを根元まで咥え込んだ自分の母親とお竜を信じられないと言う目で見詰める暁美であった。

「どう？私の調教に感謝しなければいけないわよ。普通の女ならあんなモノ入れられたら裂けてしまうわよ・・・」

何時の間にか姿を現した銀子が、驚いて目を見開く暁美を見詰めながら言った。

「どう？貴女の母親とお竜姐さんが前と後ろに二本咥えているのに、貴女は後ろだけで、つまらないでしょ？」

と、皮肉な笑みを浮かべて、後ろから黒い張り型を手にして、暁美の横に腰を降ろす菖蒲に手渡した。

それも剛沢のモノから型取りした黒光りするゴム製の筒具であった。

銀子の意を汲んだ菖蒲がニヤッと笑うと、受け取ったそれを、村崎が突き立てる僅かに下の穴に宛がった。

そして、そのままズブズブと押し込んで行った。

村崎のモノと剛沢のモノが僅かな粘膜の間を通して擦れ合う感触に悲鳴を上げた。

根元まで完全に没入させた男達が女を支えていた手を離したので、女達は自分の全体重をその肉の孔で支えることになり、その痛みに脚をバタバタさせて悲鳴を上げた。

小柄な晴江と黒人兄弟の身長差は60センチ程もあり、男二人にサンドウィッチにされた身体は床から遙か上にあった。

日本女性としては平均以上の身長のお竜と言えども、爪先は床面から大きく離れ、届かない脚をバタバタと藻掻かせた。

そんな女達の身悶えも気にする様子は無く、女の体重を自分の男根で支えたまま、女の乳房を鷲掴みにして、凝った晴江とお竜の乳首を剣を交える様に互いに擦り併せた。

敏感な箇所が互いに触れ合い晴江もお竜もアアと身体を身悶えさせた。

二人の女の身悶えを楽しむ様に乳房を揉みしだきながら、始めはゆっくりとそして次第に早く腰を上下に動かし始めた。

黒人の巨大なモノで尻穴を抉られたまま宙吊りにされ、自分の全体重をその部分で支える二人の女は、痺れた様に自由に自分の身体を動かすことも出来ず、背後から抱き抱える巨人にまるで操り人形の様に支配されるままであった。

前の孔を剛沢から模ったモノに塞がれ、後ろの孔も黒人兄弟の巨大なモノに責め立てられ、荒々しく胸を揉みしだかれたり、手前の女の柔肌に擦り合わされたりして、何時しか晴江もお竜も二人の黒人男のペースに巻き込まれて行った。

これまでスクリーンの上で無数の女を抱いて来たポルノスターらしく双子の黒人兄弟は観客の前で見せ場を作る様に腰を使い、女の敏感な部分を責め立て、その熟達した性技を存分に発揮した。

兄弟は、時には激しく深く肛門をえぐり女達を巻き上げ、激しく身悶えさせると、次には動きを弱めて沈静化させたりして、観客に艶技をアピールしながら長時間に渡って女達を翻弄し続けた。

自らの肉棒で肛門を突き刺し、女の動き制御しながら、兄弟で息を合わせてまるで腸内深く突き刺した肉棒で女を操る様に微妙に腰を動かし、そして、二人の股間に埋め込まれたまま

の双頭張り型—この黒人ポルノスターには負けるとしても、日本人としては相当大きな剛沢のモノから型取りした—が、その効果を十分発揮するよう自分の突き立てる女の尻を器用に操った。

それは、お竜にとっても晴江にとっても単に巨大な肉棒と淫具が薄い隔壁一つを隔てて擦れ合う感触だけでなく、二人の陰部を一つに繋ぐ双頭の張り型を通して、互いの瀬戸際まで追い詰められた性感が一对の淫具を通して電気が流れるように、淫具を伝わる僅かな振動でも自分の高まりを相手に伝播させ、興奮を倍加させるものであった。

ある時は晴江の中に深く突き立て、二つの孔を繋ぐ八の字の筋肉を緊張させる事により固く張り型を喰い絞めさせ、その間お竜の背後に回った男はお竜の華肉の緊張を和らげる事により、晴江により固く絞められた張り型でお竜の肉洞を激しいピストン運動で責め立て、また次の時には、兄弟で役回りを逆転させ、お竜に固く咥えさせて晴江から筒具を奪い取り、お竜を抱えたまま激しく腰を上下させて、その大きな双頭張り型で晴江を責め立てた。

目を皿の様にして見詰める観衆の前に、巨人の様な黒人兄弟に翻弄され二つの孔を^{せめ}齧り合う苦痛を超越した背筋も凍る様な壮絶な快美感に煽り立てられて、双子の兄弟の意のままに交互に張り型を奪い合い互いに責め合いながら、股間からダラダラと愛液を垂れ流す二人の女の様子が映った。

二人の黒人に宙吊りのサンドウィッチにされながら、二人の真下の床面には見る見る粘っこい樹液の池が溜まって行った。

二人の黒人兄弟は二人の女を後ろ手に宙吊りにしていたロープを既に外しており、自由な姿勢を取れたが、二人の巨人にサンドウィッチにされ宙吊りにされたまま晴江とお竜は黒人ポルノスターの技術に巻き上げられ、人目も憚らず甘い悲鳴を発する様になっていた。

前に位置する黒人男が顔を前にグイッと突き出すと、憑かれた様に唇を差し出し、ピッタリと唇を合わせ舌を絡め合って、熱くて長い口吻を繰り返すのであった。

そんな実の母親とお竜の切羽詰まった悲痛な声に煽り立てられる様に曉美も村崎の繰り出す妖しげな快感に身を震わせていた。

左右に陣取って曉美の乳房や性感帯を責め立てる皐月と筒具を操作する菖蒲の手の動きが拍車を掛ける様が一層激しくなった。

村崎に刺し貫かれる曉美も周囲の事を忘れ果てたように大声で悲鳴を上げ、激しく身悶え続

けた。

観衆に最後のアピールをする様に黒人兄弟が腰の動きを一層激しくした。

その動きに耐え切れなくなった晴江とお竜が同時に絶頂を極めた、

それに呼応する様に暁美も村崎に背後から突き立てられ、二人の遣り手に責め立てられ絶頂を極めた。

「おうおう！また母親達と息を併せて逝きよったで！・・・ほんまに器用な子や！」

と、意識を失ってグッタリした暁美の後門に硬く勃起した肉茎を突き立てたまま村崎が嬉しそうに笑い声を上げた。

緊張を失った口からは泡を滴らせ、完全に意識を失った暁美で在ったが、その部分はいまだに強い力で村崎の肉塊と剛沢から模ったモノを喰い絞めていた。

その長時間に渡る労をねぎらうように村崎が暁美の腸内に自らの股の間に溜め込んでいた熱くてねっばこい液をドッと放出した。

晴江とお竜が完全に絶頂に達したことを確認した黒人兄弟は、下品な歓声を上げて、グッタリと首を項垂れて身動きしない二人の女を間に挟んだまま、再びハイタッチした。

そして、二人を持ち上げて深々と突き刺さっていた男根を抜き取り、ステージに引かれた布団の上に横たえた。

その後、二人の後ろ髪を掴んで顔だけ起き上がらせると、まるで置き土産をするように二人の顔面に粘っこい白い精液を吹き掛けた。

顔面にベツリと黒人男が放出した白濁した粘液が付着したが、二人の女は完全に意識を失っており、荒い息を吐いたまま何の反応も示さなかった。

二人の股間はまだ剛沢の陰茎を模したモノで繋がったままであり、その後ろの孔は黒人兄弟に突き立てられたまま、閉じることを忘れた様にポツカリと空虚な孔を開いた儘であった。

「見ろよ！死んでもラッパを離しませんでしたーて、話はあるけど、逝っても張り型を離しませんでしたーて、ざまだぜ！」

「そんなに剛沢親分のモノが気に入ったのか？」

見物の男女は、意識を失っても双頭の張り型を介して繋がったままの女達に聞くに堪えない様な讒言を浴びせ掛け続けた。

完全に意識を失った晴江とお竜ではあったが、その部分だけは時々ビクビクッと痙攣し胎内

に残された張り型を喰い絞めていた。

二人の女を残したまま、黒人兄弟は素っ裸で観衆に手を振りながら、笑顔でステージを去って行った。

完全に意識を失った暁美も滑り降りる様に、村崎の身体から崩れ落ち、床の上に仰向けに倒れ込んだ。

力無く開いた股間の奥には、長時間に渡り村崎のモノを咥え込んでいたその部分は大きな開孔を見せ、その赤黒い深奥からは村崎の残した白濁した粘液が流れ出していた。

そして、その前の部分からは、緊張を失った肉襞から、半ば押し出される様に桜色の秘裂を割ってどす黒い太い陰具がピクピクと小さく痙攣する腰の動きに併せて小さく蠢きながら突き出してた。

恨み重なる目高組に連なる娘の無様な敗残の姿に二人の遣り手女はヒステリックな声でおめく様に快哉の笑い声を上げた。

母娘無残

「ほら、もっとお互いに大事な所を嘗め合うんだ！」

「もっと舌を奥まで入れて中をこねくり合わないか！」

村崎會の幹部の寝所に当てられた和室には、昨晚と代わって晴江と暁美の母娘が連れ込まれ、奈和親分と義兄弟の杯を取り交わした男達を取り囲む中央に敷かれた布団の上で、暁美が下になりその上に晴江が覆い被さる69の姿勢で、男達の哄笑や野卑な野次を浴びせられながら、互いの性器に舌を這わせ合っていたのだった。

二人とも激しいショーの後で身体は疲弊仕切っていたが、休みを与えられる筈もなく、今村崎會の幹部達の前に引き出されているのであった。

二人の女の股は大きく左右に捻げられ、布団からはみ出した足首を周囲に陣取った男達が掴んでいたのだった。

実の母娘による浅ましい女同士の口技を笑いながら見詰める男達の間に皐月と菖蒲の双子姉妹や銀子も交じって女同士三人で、目を爛々と輝かせて二人の愛技を見詰めながら、嬉しそうに酒を酌み交わしていた。

「ほほほ・・・わたしゃ今日程嬉しい日は無いよ！」

「盆と正月が一緒に来たみたいだよ！」

すっかり酔いの回った皐月がフラフラと立ち上がると、肉体を重ねて互いの秘所を必死になって嘗め合う二人の傍に寄って、上に重なった晴江の尻をピシャリと叩いた。

皐月に尻を叩かれて、うっすらと汗を浮かべた極彩色の刺青を施された柔らかい豊かな尻たぶが弾んだ。

「おや？良い音がするじゃないか！」

酒に酔った皐月が面白がってピシャピシャと晴江の尻たぶを連打した。

これまで下等な売春婦上がりの遣り手と蔑んでいた女に尻を叩かれる屈辱感に抗議する様に顔を振って悲鳴を上げた。

「ほら、口がお留守になっているよ！」

暁美を愛撫する口唇が離れたのを見た菖蒲が晴江の後頭部を鷲掴みにすると、大きく開け放たれた暁美の股間のグリグリと力一杯押し付けた。

満座の中で恥辱の行為を行う精神的苦痛に満ち溢れた二人であったが、逆らう事も出来ず、死ぬ思いで、娘の、そして母親の秘部を口唇で愛撫して、その奥に秘められた秘孔に舌を突き立てるのであった。

「ほらほら、もう十分に潤って来たんじゃないかい？」

「まあ！もうグッショリじゃないか！」

皐月と菖蒲が互いの口唇で愛撫し合う股間の様子を確認して、互いの唾液だけではなくその奥底から流れ出した豊富な樹液に股間が塗れだした様子を発見して大きな声を出した。

「実の母娘同士だと云うのに、こんなに感じてヌラヌラと濡らして、全くスケベな女達だね！少しは、恥ずかしく無いのかい？」

「アンタは私たち姉妹の事を双子の売春婦と云うことで売り出して散々荒稼ぎしてたのに、今度は自分達が^{おやこ}母娘売春婦として売り出すことに成るなんて全く傑作じゃない！」

これまでの恨みを晴らすのは今とばかり、陰険な言葉を掛け続ける双子姉妹が大声で笑いながら叫んだ。

かつては奈和親分との間で義兄弟の杯を交わし会った男達やこれまで蔑んでいた娼婦上がりの女達の目前であられもない痴態を繰り広げた晴江と暁美は全身を紅潮させ、興奮して速い息を吐き、実の母娘だというのに股間をビッショリと濡らし合っていた。

唾棄すべき男女に見守られながら禁断の行為を強制されていた母娘は、何時しかそんな周囲の熱い視線も忘れたかの様に、女の本能に突き動かされる様に、深い愛欲の淵に吸い込まれ

て行くのであった。

時々アッと甘い息を吐いて身体をビクッと緊張させる事はあったが、それでも女同士の愛欲の行為だけでは真の深い絶頂に達することが出来ないのか、思わず物欲しげに腰を振るわせるのを遣り手として経験を積んだ皐月と菖蒲の姉妹は見逃さず、ニヤリと淫靡な笑みを浮かべると、

「どうなんだい？これを挿して貰って最後までイカせて貰いたいんじゃないかい？」

懷から剛沢のモノから型取りして作った黒々と輝る双頭の張り型を取り出して、上になった晴江に見せ付けるように聞いた。

それは、先程村崎會の幹部や女達の見守るステージの上で無理矢理イカされた黒々とした張り型と同じ鋳型で製作されたモノで在ることは理解出来たが、お竜と交姦した時と違って、二つの張り型を直線上に繋いだ物であり、その二つの張り型の継ぎ目である根元の部分はまるで陰囊の様に丸く不気味に膨らんでいた。

皐月が手にする淫猥な道具を見詰めて晴江が哀しそうな目を浮かべた。

「どうなんだい？黙っていては判らないだろう！折角剛沢親分にお願ひして、借りてきてやったんだよ！」

「ああ・・・もうお許し下さい・・・」

肉体は最後の愛欲の果てを求めていたが、自分の夫と義兄弟の杯を交わし会った男達の前で実の娘と最後の痴態を晒す事の苦痛に耐えかねて、かつてお抱えの娼婦であった女に哀願する晴江であった。

「嘘おっしやい！身体はこんなに欲しがっているじゃないか？」

赤く充血し、本能的に最後の瞬間を希求する股間におぞましい性具の端を押し当てた。

その瞬間、晴江の意志を裏切るかの様に、反射的に腰を振り立て、それを咥え込もうとするかの様に性器が蠢いた。

肉洞がパツクリと口を開きその先端の雁の張った部分が半ば肉孔の中に埋没し、劣情に支配された晴江が本能的に恥辱の筒具を胎内深く受け入れようとした瞬間、意地悪くサッと張り型を引き上げた。

叶えられなかった肉欲と、意志に反して満座の前で痴態を晒してしまった悔しさと晴江は引き攣った様なわめき声を発した。

意志とは無関係に肉欲を貪ろうとする熟れた女体の真実を見とがめて、姉妹が勝ち誇った様な笑い声を上げた。

「お願いします！それを入れて上げて下さい！」

自分の目前で浅ましい女の本能に基づく醜態を示した母親の様子を見詰めて、暁美がハッキリと声にした。

「ああ・・・暁美・・・」

「良いの・・・お母様・・・二人で地獄の底に落ちましょう・・・」

「ほほほ・・・良いわよ、先ず貴女の中に入れて上げるから、貴女がお母様を慰めて上げるのよ・・・」

娘の哀しい決意を嬉しくて堪らないと、袖で口を押さえながら、右手に持った双頭の張り型の先端を暁美の股間に押し当てた。

剛沢のモノから型取りした太い張り型ではあったが、既に十分に濡れきった暁美の柔肉は、淫靡な襞を押し開き、その鰓の張った逸物をグイグイと呑み込んで行った。

「ほほほ・・・可愛い顔をして、本当におませな子だよ！こんな太い物をダラダラ涎を流しながらどんどん飲み込んで行くよ・・・」

女肉の反発を楽しむ様に力を込めて押し込みながら皐月が嬉しそうな声を上げた。

「ほらほら・・・そう言っている間に全部飲み込んで仕舞ったじゃないか！」

張り型の付け根の陰嚢を模した球形をした部分まで押し込み感激した様に笑い声を上げた。

「どう？貴女の得意技を見せてあげたら・・・」

横で見ていた銀子が股間に深々と双頭の張り型を埋め込まれた暁美の傍に近づいた。

そして仰向けに横たわる暁美の両足首を掴むと思いつき上に引き上げた。

そしてそのまま両脚を布団の上で上を向いた顔の上まで持って行った。

極端に柔軟な暁美の女体は、二つに折れ曲がって屈曲し、暁美の顔の直ぐ目の前には黒光りする張り型の先端が迫っていた。

「ほら！お母様が痛くないように先を良く濡らしておくのよ！」

銀子に命令されて、薄く目を閉ざした暁美は、怖ず怖ずと顔を擡げると、その陰具の先端に唇を押し当てて行った。

そして、自らの努力で下半身を深く折り曲げ、その筒具の半ばまで口内に含み始めた様子に、周囲の男達は驚きの声を上げた。

「こいつは驚いた！この女は自分の股の間から生えた物を自分でおフェラし始めたぜ！」

不自由な姿勢で口を使って淫靡な技を披露する暁美の姿に歓声を上げた。

「ほら！こんなに太い物でお母様が痛がらないように良くしゃぶるのよ！」

双子の姉妹は鼻を膨らませて息を荒げて口を使う暁美の髪を鷲掴みにして激しく顔を前後させて太い陰具を出入りさせるのであった。

「ほら！貴女の娘は貴女を喜ばせるためにあんなに頑張っているのよ！・・娘にお礼をしなくちゃね！」

銀子は、暁美の傍で呆然と見詰める晴江の襟首を掴むと、そのまま暁美の開け放たれた股の間に引き摺って行った。

「ほら！お礼に娘の此处を嘗めて上げるのよ！」

指先で暁美の菊花をグイグイと押し付けた。

銀子の淫らな企みに拒絶するよう顔を振る暁美で在ったが、姉妹で暁美を押さえ付けるとなおも深く陰具を口内に押し込んだ。

銀子の命令に仕方無さそうに、「暁美・・許しておくれ・・」と呟く様に言うとそのまま顔を開け放たれた股間の奥に押し当て行った。

母親の唇が自分の陰花に触れた瞬間、ビクッと身体を震えさせた。

「そうよ！そのまま舌を延ばして奥まで嘗めるのよ！」

自分の娘の菊花を優しく口唇を使って愛撫する晴江に銀子が声を掛けた。

銀子に命じられるままに舌先を延ばすと、熱く熱した肛門内に舌先を滑り込ませた。

今や一匹の性獣と化した晴江は銀子の言葉に自らの深奥に潜んだ性感を煽り立てられる様に舌先を匍わせた。

「ほら！お尻の穴をもっと開いて奥まで嘗めるのよ！」

何かに憑かれた様に娘の腸内を舌先を使って愛撫する晴江に、なおも声を掛けた。

日頃の鍛錬で充分柔らかく開く事の出来る暁美の肛門に両手の指を添えて大きく押し広げた。その瞬間、股間に植えられたモノを一心不乱にフェラチオする暁美が、ウッと声を上げた。ポツカリと開いた娘の肛孔に口を押し付け、舌を長く延ばして、狂った様にその内部を責め上げた。

母親の舌先で微妙な内部を責め立てられる快感に興奮して、口の中に含んだ筒具に我をわすれて狂った様に舌を匍わせた。

「どう？自分の実の娘のウンコの通り道の味は？・・それに、まだ中には村崎親分が発射したモノが残っているんじゃない？」

と、狂った様に口を使い合う母娘を、ヒステリックな声で笑い上げるのであった。

「ほら！もっと二人で腰を振り合わないか！」

酒の回った男が、笑いながらビッショリと汗を浮かべて激しく腰を振り合う母娘を励ます様にピシヤリと尻を叩いた。

暁美と晴江は、車座になって取り囲む男達の輪の中で、犬の様に四つん這いの姿勢となり互いの尻を押し付け合っていたのだった。

二人の股間は剛沢のモノを型取りした両頭の性具により連結され、二人が腰を前後させる度に、黒い張り型が白い尻たぶの狭間から出入りする様子が見えた。

秘部から分泌されたネットリとした愛液に塗されて両頭の張り型は陰囊の様に膨らんだ根元まで艶々と輝き、二人が激しく腰を押し引きする度に、秘裂の奥の淫靡な襞を押し込み、そして引きずり出し、豊富な愛液を垂れ流す秘部の柔肉を押し分けて巨大な張り型が出入りする度に淫靡な旋律を奏でていた。

四つん這いの姿勢で互いの尻をぶつけ合う様に激しく腰を前後に振り立てながら、正面を向いた口には男達が陰茎をねじ込み口腔によるサービスを強制していた。

「へへ・・・こちらのお嬢ちゃんも年の割には随分とおしゃぶりが上手じゃないか？昨日のお竜姐さんより上手だぜ！」

暁美の後ろ髪を鷲掴みにした男が、自分の猛り狂ったモノを押し立てながら感激した様に声を上げた。

「晴江姐さんのディープスロートも大した物だぜ！」

自慢の逸物を根元まで晴江の口内に押し入れた男が感に堪えない様な声を上げた。

男達の卑猥な声も最早耳には入らないのか、母と娘は込み上げて来た興奮に煽られるかの様に全身を燃え立たせてビッショリと汗を浮かべ、互いに激しく尻をぶつけ合い、双頭の珍具でお互いに慰め合っていた。

内奥から狂おしく攻め上る激しい情炎に、男のモノを口腔に含み頬を膨らませ、鼻腔を拡げてフンフンと激しい息を吐いていた。

既に意識は朦朧とした様子で両目は裏返って白目を剥きながら、ただ止め処なく繰り上がる肉欲に支配されるままに、本能に煽られ腰を激しく振りたて男のモノを貪っていた。

母娘が絶頂を迎えるのも後僅かだと気付いた双子姉妹と銀子は、目高組の首領の母娘をここまで墜とし込んだ事にすっかり気分を良くして互いに目配せし合い、淫靡な笑みを浮かべながら茶碗酒を酌み交わしていた。

これまで目高組に激しい怨恨を抱いていた姉妹は、もうすぐ首領の妻と娘が自分の目の前で醜態を晒す様になる事を確信して、目から涙を流しながら顔をくしゃくしゃにして満面に笑みを浮かべていた。

その瞬間、汗と愛液に塗れた尻を激しくぶつけ合っていた母娘の動きが止まり、激しく腰を痙攣させ仰け反った。

その刹那を逃さず、二人の口腔を犯していた男達が激しく白濁した液を口内に吐き出した。女達は口を怒張により塞がれているため声を上げる事も出来ず、ググッと云う様な呻き声を上げると、意識を喪失して行きながらも、調教によって鍛えられた技術を反射的に駆使して喉の筋肉を上下させて男達が放出したモノを飲み下していった。

男達が輪になって取り囲む、薄い布団の上に完全に絶頂を極めた母娘が崩れ落ちる様に倒れ落ちた。

口の端からは男達が放出した白い濁液を滴らせ、二人を継げていた巨大な張り型は、半ばまでその醜惡な姿を晒していたが、雁の張った先端部分は、いまだに二人の媚肉の中に収まったままであった。

そして、激烈を極めた絶頂の余韻に浸るかの様に、小さく呻き声を上げながら、痙攣する女肉が肉洞内に留まる張り型をビクッビクッと締め付ける扇情的な様子を取り囲む男達の目に映った。

それにつられて、母と娘の落下微塵の醜態を晒す図に男達から大きな笑い声が上がった。

そして、心の真底から強烈な快哉が一度に込み上げて来た姉妹は、狂おしいまでの勝利感に満たされて甲高い声で大きな笑い声を上げた。

すっかり良い気分で酒の回った姉妹が、ふらつく足で立ち上がると、輪を作る男達を掻き分けて、未だに頂上を極めた後の余韻に浸る母娘の前に立ち、その様子を検分する様に眺め下ろした。

未だ意識は朦朧としている様子で、瞼を薄く閉じ、半開きになった口からは激しく息を吐いて、形の良い乳房を置いた胸はせわしなさそうに上下していた。

「ちょっと何時まで良い気分でオネンネしているのよ？」

姉妹は、邪陰な声を上げると、晴江達の後ろ髪を鷲掴みにして、朦朧とする母娘の頭を揺すぶって、覚醒を迫った。

「娼婦なら娼婦らしくお客様のお出した後の始末をきちっとしなければ駄目でしょう！」

姉妹は、売春婦の惨めさを母娘に思い知らせるために、僅かな時間でも絶頂後の幸福感に浸る自由も奪い去るかのようになり、男の後始末をする様に命じるのであった。

「ちょっと！お客様が思いの丈を放出した後は、美味しそうに口の中のモノを呑み込んでから、真心を込めて後始末をするように仕込んだはずでしょう？・・私に恥をかかせる気？」
銀子が双子の姉妹に加勢して、気色ばんで二人を怒鳴った。

薄い意識の下で、物憂げに上体を起こすと、静かに口を開き、放出を終え逆上^{のぼ}せ上がっていた情熱も冷めたのか半勃起上体で下を向く目の前の男のモノに鼻先を押し当て、口に含んで行った。

暁美も双頭の張り型で母親と繋がったまま、舌を突き出すと男のモノを愛おしげに舌を使って清め始めた。

「へへ・・良い気持ちだぜ！また大きく成って来やがったぜ！」

母娘の巧妙な舌技を盛り込んだ口腔での愛撫に、男達がうっとり天井を見詰めながら、甘い呻き声を上げた。

再び力を取り戻し始めた男のモノを貪る様に、より深く含もうとして身体を動かした時、母と娘を継いでいた巨大な張り型がポロリと布団の上に抜け落ち、大きく開口したままの女の洞窟が姿を現し、その奥深い空ろの中からドロリと粘っこい液が流れ落ち、室内に雌の臭気が拡がった。

「お前達、さっきは黒人の大きなモノを突っ込まれたり、村崎親分に衝いて貰ったりして、まだ此处が疼いているんじゃないかい？」

やっとの思いで、男のモノを清め終わって、激しい絶頂を迎えた後の疲労感で横膝に下半身を投げだし、グッタリと腰を落とす女達の尻たぶを拵げると、未だにヌルヌルと愛液に塗れたままの華洞の直ぐ上の蕾を指差した。

「ああ・・もうお許し下さい・・」

女親分としての器量も失い、か弱い女の本性を剥き出しにされた晴江が、か細い声で以前に自分達が暴力でこき使っていた売春婦上がりの女に涙を流しながら哀願した。

「何言ってやがんだい！あんた達は自分達同士で充分楽しい思いをしたかも知れないけど、まだ一回しかお客を満足させていないんだよ！私たちなんか男に身体を売っていた時は、一晚で10回だって20回だって、お客を満足させたものさ！余ったれんじゃないよ！」

俯いて悲哀の涙に咽ぶ母娘に、勝ち誇った様に姉妹が笑い声を上げながら畳み掛けた。

「さあ、グズグズしてないで、今度は剛沢親分のモノを此処に仕込んで、おしゃぶりをさせて貰うんだよ！」と言いながら、皐月が中指を晴江の菊花の中にズブリと突き立てた。

突然指を根元まで埋め込まれて、晴江が反射的にリング状の筋肉を締め付けた。

「おや・・・中々良い絞め具合じゃないかい？やはりまだこちらは元気一杯の様だね？」

と、ニヤリとして晴江の方を見つめた。

「腕っこきの娼婦のコツはね・・・前が疲れて痺れて来たら後ろを使って、後ろが疲れて痺れて来たら前を使って、何度でもお客様を搾り上げるんだよ。前の穴の疲労が回復するまで、後ろを使って頑張るって、二つの穴を交合に使うってお客様がもう出なくなるまで頑張るんだよ！」

と、菖蒲が諭す様に口を挟んだ。

それでも、晴江達は満座の奈和親分と義兄弟の杯を交わした顔見知りの男達の前でこれ以上の恥を晒したくない一心で、大声で泣き声を上げながら激しく頭を振った。

取り巻く男達は、泣きわめき愁嘆場をさらす元義兄弟の妻と娘の姿を目にして、同情でなく、よりサディスティックな劣情を掻き立てられ、残忍な目の色を浮かべて見守った。

「嫌だって言うのかい？・・・幾ら嫌だと言っても絶対にやらすからね！」

姉妹は男達の作る輪の外側に座ったまま一人で手酌する銀子の方に目配せした。

姉妹の視線を受けた銀子は肯いて、手元に置いていた袋から何やら長い棒の様な形をした物を取り出した。

棒の長さは60センチ程あり、直径は3センチ程で、その表面は鈍く輝る銀色をしており金属で出来ていることが判った。

その妖しげな器具の一方の端は手で掴める様に木製の握りが出来ており、その根元からは長いビニールのコードが延びて、電気のコンセントに挿せる様にプラグが取り付けられていた。銀子はその長いコードを解す様に延ばして、壁のコンセントに差し込んだ。

その様子に気付いて晴江の顔が、咄嗟に青ざめた。

その怯えた表情に満足した様に、「憶えているかい？これは、聞き分けのない売春婦や売り上げの上がらない売春婦に無理矢理客を取らせるためにあんたが作らした折檻用の道具さね！」

「あんたも頭が良いよね！ぶったり蹴ったりしたら、大事な売り物の身体に痣や傷が残るけど、電気なら身体に傷は残らないからね・・・私も昔、具合が悪くて客を取れない時にもこい

つに励まされて無理矢理客を取らせれたもんさ・・・」

目に冷徹な光を浮かばせ呟く様に言った。

「・・・馬鹿だね、あんた達も・・・ゴネた挙げ句こんな物を使わせてさ・・・」

「本当は身体に押し当てて使うんだけど、組の男達は面白がって、聞き分けの無い女郎に対してはアソコに突っ込んで使ったものさ・・・アソコを責められると、どんな気の強い女でも一遍に生まれ変わった様に素直になるもんさ・・・」

姉妹は、責め具を手に取り、昔の事を思い出すかの様に、冷酷な光を目に宿して語りかけた。母と娘は男達の輪の中で、恐怖に怯えてブルブルと身体を震わせ、互いにヒシと抱き合い、拒もうとしたが、周囲の男達が面白がって二人の身体を引き剥がすと、布団の上に押さえ付け、必死になって抵抗する晴江と暁美の股間を大きく左右に押し広げて行った。

「アアー！イヤイヤ！お願いします。やります！やります！何でも言う通りにしますからお許し下さい！」

母と娘は恐怖に身体を震わせ、泣き叫びながら哀願した。

「まあ、たまには、あんたも自分で作らせた物を自分で味わって見るのも良いさ！」

姉妹は嬉しそうに微笑みを浮かべて、その太い金属棒の先端をまだビッショリと実の母娘が流し合った愛液に塗れたままの柔らかな褌に包まれた花園の中心部に宛がった。

晴江には菖蒲が、暁美には皐月がその残忍な棒を押し当てると、その丸くなった金属の先端で柔肉を左右にこじ開ける様に棒を握る手に力を込めた。

絶頂を極めたばかりで未だに神経がそそけ立つ肉洞の奥に冷たい異様な様な物を押し込まれて、ウッと身体を仰け反らした。

女達の恐怖感に反して、度重なる荒淫に熟した女芯は、それが恐ろしい災厄をもたらす悪魔の道具だとも知らないのか、まるで自らの快美感を引き出してくれる器具で在るかの様に能動的に肉壁を蠢かして奥へ奥へと誘って行くのであった。

先端から10数センチが二人の女の秘奥に埋没し、子宮の入り口に当たった事を確認した姉妹は、「ほほ、奥まで入ったじゃないか・・・」

「こちらのお嬢ちゃんも嬉しそうに呑み込んで行ったよ」と、そこの有様を淫靡な目で見詰めながら笑みを浮かべた。

女肉を巻き込み折檻具を咥え込んだその部分は、ピッタリと隙間無く金属の棒を喰い絞め、閉ざされた肉壁の扉の外には鈍く輝る金属の棒がまるで槍の様に付きだしていた。

四方から母と娘の身体を押さえ付け、両脚を掴んで股間を全開にする男達の、そこの有様を

目にして次の残酷な場면을想像して生唾を呑み込んだ。

姉妹が嬉しそうに淫靡な笑みを浮かべると、手元のツマミを操作して、二人同時にカチッとスイッチを押した。

二人の秘奥に高電圧の電流が注ぎ込まれた。

その瞬間、ヒッ！と大きな悲鳴を上げて二人の身体が仰け反った。

そして、その時同時に、女達を押さえ付けていた男達も悲鳴を上げて手を離した。

「おやおや、大事なことを言っておくのを忘れたね。この電気棒の折檻をする時は、女を押さえ付ける男は感電しない様に準備するもんさ・・・ゴムの手袋を付けるとかね・・・」

と、感電のショックで唖然とした表情を浮かべ、電流が通ってまだ痺れの残る手を撫でさす男達を見回しながら、姉妹が面白そうにケラケラと笑った。

「この糞婆！知っててわざとやりやがったな！」

突然の電撃を喰らった男が気色ばんだ。

「しかし、身体を押さえただけでも、これだけのショックを受けるんだ。アソコからもろに電気を流されたこの女達は物凄い苦痛だろうぜ？」

兄貴格の幹部が、顔を真っ赤にさせて怒る男の肩を押さえながら言った。

その男の指摘の通り、体内から直接高電圧を注ぎ込まれた晴江と暁美は、電撃の終わった今でも、後遺症の様に残る耐え難い苦痛に狂った様に身悶え続けていた。

「どうだい？大人しく剛沢親分の張り型をケツの穴に収めて、互いに突き合いっこしながらおしゃぶりするかい？」

激烈な苦痛の後の放心状態にある母娘に問い掛けた。

今となっては、二人ともただ肯くしか道は無かった。

「あんた達も、今ではうちの組のお抱え女郎なんだから、あんな男に抱かれるのは嫌だとか、今日は身体が具合悪いから嫌だなんて、我が儘を言ったら、何時でもこの電気棒を使ってやるからね！」

菖蒲が遣り手らしい陰険な目つきで、怯えた目を向ける晴江達を睨み付けた。

姉妹は晴江と暁美に再び四つん這いの姿勢をとらせると、互いの尻が向き合う様にした。

皐月が双頭の張り型の中央を握って、その両端部分を尻を向けて合って犬の様に四つん這いの姿勢をとる二人の菊花の中心に宛がった。

「ほらそのまま尻穴の力を抜いて互いに押し合いながら身体の中に納めて行くんだよ！」

電撃の余韻かそれとも、次々に残虐性を発揮する遣り手姉妹に対する恐怖心からか身体を小刻みに震わせ、ハアハアと荒い息を吐き、額にビッショリと汗を浮かべながら、母と娘は少しずつ後ずさりして、互いに腰を押し付け合った。

細かく織り込まれたセピア色の皺を少しずつ押し広げながら、鰓の張った先端部が、徐々に開き始めた腔口の奥にジワジワと沈み始めていった。

「ホホホ・・・ローションも使ってないというのに、ケツの穴がどんどんと広がってこの大きな物を美味しそうに呑み込んで行くじゃないか！普通の売春婦じゃ出来ないよ！流石は銀子ちゃんの肉体改造の成果だね！」

母娘は苦しように眉根を寄せ、唇を噛みしめ、額に汗を浮かべながら、銀子からの調教を思い出す様に、男を快楽に導く器官として改良を受けた入り口のリング状の筋肉を自らの意志で開き、周囲の粘膜を引きずり込みながら黒い塊を直腸の奥に呑み込んで行った。

姉妹は目を爛々と輝かせ、その部分が柔らかく膨らみ、鰓の張った亀頭部分を完全に腸内に収め、それに続いて長い竿の部分徐々に呑み込んで行く様を見続けた。

「ほら！そう言っている間に完全に呑み込んでしまったよ！」

姉妹の指摘する通り、今や中央の連結部の陰嚢に似た太い球状部分を残して完全に二人の女の尻の中に埋没して行った。

遣り手姉妹の折檻を恐れる母と娘は更に押し込め合ったので、二人の双臀は互いに触れ合い、二人の会陰に中央の球状部が密着して、ビクッと身体を震わせた。

巨大な性具を根元まで挿入し終えて、額に汗を浮かべてハアハアと息を吐く二人に、ピストン運動を促す様に姉妹が尻をピシヤリと叩いた。

「真面目に腰を振り合わないで、また電撃をお見舞いするよ！」と、電気棒を手にしながら姉妹が勝ち誇った様に叫んだ。

電撃の恐怖に急かされて、母と娘は犬の様に四つん這いの姿勢で腰を怖ず怖ずと前後に動かし始めた。

太い亀頭部分が直腸を内側から刺激して、母娘は小さく悲鳴を上げながらビクビクを腰を蠢かせた。

「それじゃ、次は俺たちのモノを嘗めて貰おうか・・・」

二人の男が、女達を取り囲む輪の中から立ち上がり、正面に立った。

男達の毛むくじゃらの股の間からは、いきり立った醜い肉茎が天を向いていた。

めくるめく快感への期待で、既に鈴口からは透明な液が滴り出していた。

その頃、村崎の寝室では昨晚と入れ替わってお竜が夜の相手をしていた。

村崎の嗜好に合わせて、お竜の肉付きの良い白い身体は亜麻色の麻縄で後手に縛られていた。両手を重ねる様に後ろ手に縛った麻縄は、胸の前に回って、豊かな両の乳房の上下を二巻き三巻きしてお竜の良く張った乳房を括り出す様に縛り上げていた。

下半身は綸子地の艶やかな光沢を放つ藤色の越中褌を身に着けただけで、布団の上に胡座で座る村崎に背を預ける形で、先程からこの嫌らしい初老の肥満男の執拗な愛撫を受けているのであった。

お竜の程良く皮脂を載せた豊かな尻を、胡座をかいた太股で受け止めた村崎は、両手を前に回して、麻縄で括り出された柔らかな両の乳房を粘っこく愛撫していた。

これまで何千人もの女を抱いて来たと豪語する村崎の手は、ゴツゴツとした無骨な老人の指先とは思えない程、器用に細かく動き回り、お竜の性感のスポットを少しも外すことなく的確に読み取り、指先と掌を使って柔らかく乳房を揉みしだし、乳首を転がし、お竜の情念を昂ぶらせていった。

嫌らしい好色の老人ーと、心ではどんなに嫌悪しても、このヤクザ世界を支配する大親分の豊富な女遊びに裏打ちされた卓越した技巧は、確実に女体の奥に秘められた神秘の扉を押し開け、その奥に眠っている女の情念を探り当て、それへ巧みに刺激を加える事により、呼び覚まされた肉欲に火を点し、熱く滾る様に燃え上がらせて行く事を身を以て味合わされるお竜であった。

このままではこの好色な老人の前に、生身の女の肉欲を露わにしてしまう事になるーと、怯えて、「アア・イヤ！」と時々口にして、次々と深奥から沸き上がって来る肉欲の暴走を食い止めようとするのであったが、最早そのような抵抗は無力な状態にまで追い上げられている事を確信した村崎は、お竜の情感を更に掻き上げるよう、益々愛撫の手を激しくするのであった。

村崎が背後から見詰める、お竜の細いうなじが熱気を帯びて紅潮し、開いた毛穴から蒸される様に雌の匂いを立ち昇らせる様子を得意の技巧を駆使して益々性感を昂ぶらせながら満足した目で眺めた。

お竜の身体から発する芳香に酔った様に、お竜のうなじに分厚い唇を押し当て、舌先を舐めさせた。

両乳房を責められながら、首すじの性感帯を責められて、お竜は何かを求める様に顔を後ろ

に向けた。

そこには淫靡な笑みを浮かべた村崎の顔が在ったが、熱に浮かされた様に積極的に自らの唇を非情な裏切り者の唇に押し当てると、憑かれた様に舌を絡め合い、目高組をあっさりと見捨てた憎い大親分の唾液を喉を鳴らして呑み込んだ。

やがて、乳房の愛撫にも飽きたのか、左手で乳房を揉み上げながら、右手を滑らかな感触の絹の下帯の上に這わせ始めた。

スベスベとした薄い絹の布地の上から、左右の豊かに盛り上がった秘肉の作る狭間を撫でられ、お竜の身体に電流が流れた様にビクッと硬直した。

お竜のその部分の感度の良さに満足した様に、ひとつ肯いた村崎は、滑らかな絹布の上から指先で秘肉の間の谷間をなぞったり、掌で盛り上がった柔肉を愛撫したりした。

ひとしきりお竜の股間の愛撫を続けた村崎が、おやっ？という様に指を止めた。

そして秘所に密着した褌の間にこじ入れる様に指を入れると、その秘裂の狭間をまさぐった。

今は奥から溢れ出る熱い樹液に指を濡らしながら、その肉の洞窟の中に指を差し入れた。

「おや？お前^{まん}ここにヒ首を忍ばせてるな？」

肉洞をこじ開け、その中の硬いモノを指先で触りながら、堪らない様に熱い吐息を漏らすお竜に問い掛けた。

「どや、見せてみい」

お竜をそのまま前に押し倒すと、大きな尻が村崎の前に立ち上がった。

好色な笑みを浮かべると、尻の狭間を被っていた、絹の布切れを横に押し分け、その内部をギラギラした眼で検分した。

綺麗に剃毛され覆い隠す物の無い陰部が村崎の目の前に剥き出しとなった。

執拗な愛撫により燃え上がった情炎により、ヌルヌルとした愛液を溢れさせて艶々と輝き、その部分が発する甘い女の芳香が村崎の鼻を擽った。

「どや、出してみい」

村崎が褌の布を横に除けて、濡れそぼる女の谷奥を剥き出しにしたまま、尻をピシヤリと叩いた。

村崎に命じられて、ウツと下腹に力を込めたお竜の鮮やかな色を帯びた花園の中心部が奥からモリモリと盛り上がって来た。

やがてピタリと閉ざされていた華肉の扉を内側から押し分ける様に、毒々しく鮮やかな濃い紫色をした丸みを帯びた樹脂製の物体の先端が表に姿を現した。

その張り型は丸く淫口を押し開き、周囲の肉壁を引きずる様に、益々その大きさと長さを露わにして行った。

秘裂を裂いて目の前で巨大な張り型を産み出すお竜の様子に、生唾を呑み込みながら、憑かれた様に見守り続けた。

ウッとお竜が小さく呻き声を上げ、尻をブルッと震わせると同時に、スポッと音を立ててお竜の股間から張り型が勢い良く空中に飛び出し、胡座座りの村崎の股間に落下した。

お竜が秘奥から吐き出した張り型は、両端が丸くバナナの様に若干反った形をしており、一方の端には亀頭を模した様に鰓が盛り上がっていた。長さが15センチ程で一番太い部分の直径は4センチ程あった。

黄原が予め村崎の部屋に連れ込む前にお竜の胎内に仕込んでおいた物だった。

長い間お竜の胎内で暖められ、お竜の体液に塗れたそれから湯気が立ち昇っている様に村崎には見えた。

お竜の股間から出現した、大きな張り型に一瞬村崎が感嘆の声を上げた。

村崎が驚いてジッとお竜の産み落としたモノに目を奪われている様子に気付いたお竜が、

「村崎の大親分、お竜はこうして両手を後手に縛られて、それを自分で使うことが出来ません。どうかそれでお竜を慰めて下さいまし・・・」

ゾッとする様な色っぽい流し目で見詰められ、甘い声音で囁かれて、村崎の好色な本性が煽り立てられた。

「これは、これは、こんな立派なヒ首を腹の中に仕舞い込みよって、ほんまに大したヤツや！」と、ネットリとした粘液に濡れ、まだ熱く温もりの残るそれを嬉しそうに手にすると、

「慰めて欲しいって、ここか？それともこっちか？」

と、張り型を産み落としたばかりの前の部分と、その後ろの穴を交互に張り型の先端で擦るのであった。

「アアッ・・・親分にお任せしますわ・・・」

娼婦としての技巧を駆使して、村崎の悪戯にむずかる様に尻を振って、鼻に掛かった甘い声で誘惑するのであった。

「ほな、こっちにしょか。」

亀頭を模った張り型の先端を、お竜の菊花に宛がってグイッと力を込めた。

ああ・・・と、甘い溜息を漏らすと、お竜の愛液で潤滑されたそれは、何の抵抗もなくズブズブと埋め込まれて行った。

「おう、おう、すんなりと呑み込んで行きよるわ・・・」

徐々に手に力を入れながら、お竜のその部分の筋肉の収縮を確かめるかの様に、嬉しそうな顔をしてどんどん奥まで入れて行った。

10センチ程挿入した所で、端を持ってゆっくりとお竜の反応を確かめながら前後に操作を始めた。

辛そうに眉根を寄せて、ハアハアと肩で息を吐いているが、村崎にはお竜が、その行為を辛そうに感じているのでは無く、肛口や腸内から感じる刺激に甘美な感覚を呼び覚まされていることが判った。

後手に縛られた両手の指が何かを掴もうとしているかの様に蠢き、両脚の指が反り返り、吐く息が、甘く村崎の鼻腔を擦った。

「どうやら、お前^{まん}もここで感じる素質が在る様やな？今夜はゆっくりと鍛えてやらないかな・・・」

村崎の操作する筒具の前に官能の渦を掻き立てられ始めたお竜の様子を観察しながら呟いた。村崎が口にする通り、巧みな筒具の操作によりお竜の性感は抑制が効かない程昂ぶっていた。絶妙に操られたそれは腸内の襞を内側から柔らかく擦り、腸管内にそんな快感のスポットが在ったのかというような微妙な場所を刺激し、膣と直腸を隔てる薄い粘膜越しに膣内の性感部分も同時に責め立てるのであった。

体内に溜まった汚物を排泄するだけの不潔な開孔部としての認識しかなかったお竜は、これまで肉体改造で其処を鍛えられた時でも、変態じみた客から其処を責められた時でも、常に嫌悪と苦痛しか感じず、その部分で快感を感じたことなど無かった筈なのに、今村崎の女体の秘密を全て知り尽くした様な巧妙な技工により、堪えようにも身体がビクンビクンと反応し、ドクドクと熱い血流が駆け巡り意識が飛びそうになっていた。

「ああっ、親分、お竜はもうイキそうです・・・」

お竜が尻を高く擡げたまま、布団に押し付けた顔を苦しげに蹙めて、敵への全面降伏を口にした時、

「まあ、そんなに慌てんな・・・慌てる乞食は貰いが少ないーと、言うがな！」

と、笑いながら責め具を引き上げに掛かった。

「イヤ！抜かないで！」

後少しで、快楽のゴールに達しようとしていた刹那に、快樂棒を引き抜かれて、涙を流しながら叫び声を上げた。

菊花の蕾から張り型を抜き去ろうとした時、そうはさせじと力強くそれを喰い絞めたお竜のその部分の筋肉の強さに、村崎は目を瞠った。

責め具を引き上げられ、ポッカー空いた虚ろな洞窟から腸内の香りが流れ出て、女芯から流れ出る生臭い雌の匂いと混じり合って村崎の鼻腔を刺激した。

肛門性交を好む村崎には、腸内の排泄物から発する臭いも、性感を刺激する芳香の一つであった。

極限まで性感を高められたあげく、突然快楽の源泉を失って、空ろになった肉の洞窟に喪失感だけが残し、満たされぬ思いにお竜は顔を左右に振って泣き声を上げた。

そんなお竜の様子を覗いながら、村崎がドッコイショと腰を上げた。

その股間には醜悪な肉茎が屹立していた。

そして、その先端を前の花園の中心に押し当てた。

後ろの快楽源を責め立てられ煽り立てられながら、前の部分の虚しさを同時に感じていたお竜はホッとした様に、腰を蠢かせた。

村崎の陰茎がお竜の華肉を割って、中にズブズブと侵入して来た。

滾る様に熱く、固いそれは、とても年相応には感じられず、村崎の絶倫の精力を予感させるモノで在った。

村崎のそれにより肉洞内が満たされた時、同時に震えが来る様な快美感が背筋を突き抜ける様に感じられた。

晴江や暁美から聞いてはいたが、まるで村崎がこれまで抱いて来た数千人の女の怨霊が村崎の体内に宿っており、それが肉の管を通して一機に、お竜の身体に流れ込んで来たと言う様な怒濤の性感に押し包まれるのであった。

村崎のそこは、それだけが別の生き物でありお竜の膣内で自由に暴れ回っているかと思わせる程、秘められた快楽源を的確に探り出し、刺激し、再びお竜を性感の頂きに押し上げて行くのであった。

自制心を完全に失ったお竜は村崎に後ろから衝かれる度に、アアッ、アアッと鼻に掛かった悲鳴を上げ続けていた。

完全に村崎の技巧の罠に嵌ったお竜は、最早憎い敵に抱かれている事も何も考える事も出来ず、ただ込み上げる快感の渦の中に身を委ねていた。

お竜が進退窮まった状態に陥ったことを確信した村崎は、布団の上に転がっていた、張り型を再び手にした。

そして、それを村崎の前後運動に呼応する様にピクピクと収縮を繰り返す、菊の蕾の中心に押し当てた。

そして、お竜の快美感をより昂進させる様、それをグリグリとねじ込んで行った。

村崎の陰茎で前の部分の快楽源を刺激されながら、同時に後ろの快楽源も張り型で刺激され、呼吸が止まる様な強烈な快美感が一機に込み上げて来た。

お竜の理性は完全に喪失し、真っ白になった意識の中で、ただ女の本能に基づく貪欲な肉欲だけが、その二つの前後運動を受け入れていた。

全身にビッショリと汗を浮かべ、白目を剥き、ウウ、ウウと呻く様な声を上げながら、快感に身体を痙攣させるお竜の姿を村崎が眼を細めて見守った。

最早高名な女博徒としての姿も完全に失い、女の本能を剥き出しにして肉欲に狂う、一人の哀れな雌に墜ちてしまった姿を目に焼き付けた。

そして、その女の本能に基づく燃えたぎる様な肉欲の嵐も、そろそろその限度を逾越し、地鳴りを上げて火山が大爆発を起こす様に、激烈な終焉をもうすぐ迎える事を確認していた。

「お見事、お見事！二人して同時に尻の穴で逝ったわね！」

実の母と娘で在りながら、肛門に呑み込んだ張り型を互いに動かし合い、今激しい絶頂を極めた二人に取り囲む男達からドッと哄笑が沸き起こった。

皐月と菖蒲の姉妹も憎い母娘をここまで墜とし込んだことに、言葉では表せない痛快感が込み上げて来て、泣き笑いしながら手を叩いた。

「ほら、さつきも言った様に、お客様の出したモノを美味しそうに呑み込んで、丁寧に後始末をするのよ。」

村崎に肛門を貫かれてから肛交に対する性感に変化が生じたのか、実の母と娘同士で禁断の孔を使って交わると言う背徳行為にも拘わらず、まるでそれに対して嫌悪を感じることなく、これまで感じたことが無かった様な、鋭い快美感を伴った絶頂を極めて、没我の境地に在る二人に声を掛けた。

前のめりにくずおれる様に布団の上に倒れ込んだ、二人の羞恥の孔は未だに双頭の張り型で繋がったままであった。

禁断の交わりの後の凄まじい終末が未だに尾を引いているのか、まるで痴呆者の様にボンヤリとした表情で、口の端から白い液を滴らせながら、ゆっくりと上体を起こすと、放出を終えて目の前に立つ男の股間に顔を埋めて行った。

男の精気に当てられた様に、牡の匂いを立ち昇らせるモノを口一杯に頬張り、舌を使って汚れを清めながらウツトリとした表情で、まだ繋がったままの張り型で腸内を捏ね回す様に、親子で豊かな双臀をそれを軸にして円を描く様に揉み合うのであった。

ようやく男のモノの清掃を終え、意識が戻り始めたのか、ハッとした様に腰を引いたので、二人を結び付けていたモノが落下した。

長時間剛沢の逸物から型取りしたという野太い張り型を呑み込んでいた部分は、直ぐには閉じることはなく、赤黒い内部をマザマザと晒していた。

二人の間に落下した黒い張り型からは、直腸内の匂いが立ち昇る様に感じられた。

女として人に見せられない秘密の場所を赤ら様に示す母と娘の佇まいに、男達はその開け放たれた部分を指差して哄笑した。

かつての義兄弟や顎で使っていた売春婦の前で、浅ましい姿を晒したことに対する羞恥の念が沸き上がって来たのか、二人は布団の上に正座して、頭を垂れ、メソメソと啜り泣きを始めた。

「さあ、お待ち遠様、貴女たちもこれで充分ウォーミングアップは出来たでしょうから、これから村崎會の皆様のお相手をして頂くわよ！」

と、遣り手の姉妹が楽しくて堪らないと言う様に手を叩いて促した。

これを聞いた晴江達は、ハッとした顔をして、

「ちょっと待って下さい！私たちは続けざまに絶頂を迎えて、もう身体を動かす事も出来ません。ほんの少しの間で良いから休ませて下さい。」

と、かつては歯牙にも掛けなかった遣り手に頭を下げて哀願するのであった。

「何贅沢言っているのよ！貴女たちは自分の肉欲を充分満足させて、良い気持ちになったかも知れないけど、まだ誰もお客さんから抱かれていないのよ！」

「今までののは、お客さんを興奮させて後の仕事をやり易くするための前技で、これからが本番なのよ！」

「売春婦の仕事は一にも二にもお客さんの欲望を満足させることで、自分の欲求なんか持ちや駄目なのよ！」

「誰が最初に貴女たちを抱くか、順番をくじ引きで決めてあるんだから、グズグズ言っで無いでさっさと始めなさい！」

並の売春婦なら涙を流して嫌がるという噂を持つ性豪揃いの村崎會の幹部を相手に、すでに

精力を使い果した自分達が、これから目の前に並ぶ男達の豪刀に刺し貫かれることになるという恐怖に、ヒステリックな泣き声を上げて、布団の上に俯し号泣する晴江達に姉妹が交互に畳み掛ける様に怒鳴りつけた。

「さっさと言うことを聞かないと、これだよ！」

と、業を煮やした菖蒲が電気棒を手にとると、晴江の背中に押し付けた。

瞬間、凄まじい電撃が流れ、晴江の身体が弾かれた様に横様に倒れた。

青ざめた表情で呆然とする晴江達の前に、

「最初は、俺が大姐の後ろか・・・」

「俺はお嬢ちゃんの前の方だ・・・」

「昨夜と違って今日は二人だから順番が早く回って来るぜ・・・」

と、順番と最初の攻撃場所を書かれた紙を見て男達が嬉しそうな声を上げた。

「先ず、晴江姐さんの得意技のディープスロートをじっくりと味あわせて貰おうか・・・」

と、ニヤニヤしながら何人もの男達が二人の女を取り囲む様に布団の上に上がって来た。

「へへ、おれは晴江姐さんの前の方だぜ、何時も奈和の兄貴が自慢していた美人の恋女房を抱ける事になるなんて、こんな幸せなことは無いぜ！」と、期待感で股間のモノを自分の指で扱きながら晴江の前に迫った。

涙で霞む女達の目に、甘美な肉欲への期待で隆々を勃起させた男のモノが映った。

「ほう？・・・汐まで嘔きよったか！・・・そんなに良かったんか？」

村崎の面前でグッタリと身体を投げ出すお竜の全身を嘗める様に見詰めながら、女盛りのお竜をここまで追い詰めた自分の精力に満足した様に、ほくほく顔で呟いた。

凄まじかった絶頂の瞬間を迎え、精魂使い果たしたお竜は、身体を横倒しに布団の上に倒れ込み、全身は水を浴びた様に汗に塗れ、全力で疾走した後の様に、ハアハアと激しく肩で息をしていた。

お竜の前の布団は、お竜の胎内から迸り出た体液でグッショリと濡れていた。

意識が戻っていないのか白目を剥き、パクパクと口を開いて、麻縄で括り上げられた形の良いい乳房を載せた胸を忙しく上下させるお竜の様子を覗いながら、

「綺麗な綸子の褌をこんなにベチャベチャにしてしもうて・・・気持ち悪いやろ、今、取って上げるさかいな・・・」と、舌舐め擦しながら肥満した大きな腹を揺すって笑った。

お竜の絞めていた越中褌は乱れて最早辛うじて秘所にまとわり付いているだけであったが、

村崎はいそいそと緩んだ紐も解いて、グッショリと濡れた絹の布切れをお竜の腰から奪い去った。

「おうおう・・・まるでお漏らしした赤ん坊のオシメみたいや！」

奪い取った褌を検分する様にジッと見詰め、お竜の秘所に触れていた部分を鼻に近付け、匂いを嗅ぐ仕草をした。

村崎が褌の紐を弛めている最中も、お竜は意識が戻らないのか、時々、イヤ・・・イヤ・・・と小さく呻く様な声を上げるだけであった。

胸をきつく縛り上げた麻縄を残して、今や身に着ける物は全て失って、雪の様に白い艶やかな全裸姿を晒すお竜の綺麗に下草を刈り上げられた秘所が村崎の目に鮮やかに映った。

お竜の無抵抗を良いことに、両足首を掴むとそのまま両脚を押し広げた。

意識の無いお竜の両脚には力が入らず、何の抵抗も無く扇の様に大きく広がった。

汗にグッショリと濡れて艶々と輝るツルツルの柔らかな女肉の作る深い溪谷の内側をマザマザと晒して、パツクリと開いた中心部分には、今の今まで村崎に蹂躪されていた秘園の粘膜の底に穿たれた肉の孔が夥しい愛液を滴らせながら、まだ閉じることなくその内部を見せていていた。

そしてその僅か後ろには村崎に埋め込まれた性具がその毒々しい姿を見せていた。

村崎は筒具を摘んで抜き出すと、弛緩したその部分の筋肉は、閉じることを忘れて鮮烈にその奥の様子を見せていた。

村崎はお竜の両脚を全開にしたまま、その完全降伏を遂げ、隠しようも無く無残な光景を晒す股間に顔を近寄せた。

お竜の流した汗と愛液と腸管内の匂いと小便臭が縋い交ぜになって、村崎の鼻腔を刺激した。

「ああー、良ー匂いや！」

お竜の秘所から立ち昇るツンとする刺激臭と生臭い雌の性臭の入り交じった濃厚で蠱惑的な匂いを肺の奥深くまで吸い込みながら、村崎が感嘆の声を上げた。

「それに、ほんまに、美味しそうな穴やで・・・」

すっかりと開花し、外部に向かってその奥の佇まいを見せる可憐な菊花を連想させるその部分に魅入られた様に村崎が顔を近づけた。

そして、未だに開孔したままの花弁に唇を押し当てた。

「ああー、良ー味や！」

そのまま村崎は舌先を延ばすと、未だ閉じ合わされていない後門を通して腸内をグルリと舌

先で味わった。

美女との肛門性交に部類の喜びを覚える村崎に取って、痔や脱肛のない綺麗な若い女の肛門の味覚を自らの舌で味わうことは最大の快感であったのだ。

アアーッ、イヤ！と自分の腸内を男のザラザラした舌先で嘗め回されるという、異常な感触にお竜の意識が戻り始めた。

しかし、依然身体に力が入らず、村崎に両足首を掴まれ、大きく股を割ったまま、後ろの孔を陵辱され続けるのであった。

「どや？充分開いたやろ？今度は儂のモンで良^え一気持ちにさせたるか？」

まだ逞しく屹立したままの男のモノをお竜の眼前に見せ付けながら言った。

この年齢を感じさせないでっぷりと肥満した大男の絶倫の精力に恐れを抱いた様に、

「ああーっ・・・少し休ませて下さい。お竜は疲れ切って身体を動かすことも出来ません・・・」

と、涙を浮かべながら哀願するのであった。

「何言うてんねん！お前は、さっきから何遍も逝^{まん}って、良^え一気持ちにさせてもろたか知れんが、儂はまだ一遍も逝^{まん}って無いんや！娼婦のくせに自分ばかり満足して、客を満足させへんて、何を考えてんや！」

怒りで顔を赤くさせて、大きく膨張した物をお竜の柔らかく開いた菊花の中心に押し当てるとそのまま、腰を押し付けて行った。

村崎から与えられた度重なる性の技巧ですっかり神経が敏感になった箇所を押し拡げて、太い陰茎がズブズブとめり込んで来るのが判り、お竜が腰を振って悲鳴を上げた。

遣り手姉妹と銀子が嬉しそうに茶碗酒を酌み交わす目の前で、晴江と暁美の親子が、村崎會の幹部連中から蹂躪^{しご}されていた。

母と娘は全身汗塗れになりながら、前後の孔を性欲に狂った男達に串刺しにされ、必死に腰を振り立て男達の暴虐の嵐と戦っていた。

女達の叫び声を封じる様に三人目の男が、女の後ろ髪をしっかりと掴んで、口腔に己のモノを突き立てていた。

既に何人もの男が母娘の全ての孔を貫き通し、生臭い男の精を残していったが、村崎會を構成する暴力団の各組織を代表する13人の組長達は、二人の女の全ての快樂の門を一通り堪能しなければ満足出来ないーとばかり、自身も汗塗れになって飽く無く挑み続けるのであつ

た。

晴江も暁美も男を快感に誘う様に開発された開孔部を夫や父と義兄弟の杯を交わした男達が、既に何遍通り過ぎて行ったのか記憶も薄れ、ただ男達に求められるままに銀子達から教えられた技巧を薄れ行く意識の中で反射的に繰り返しているだけであった。

盛りの付いた野獣の様に肉欲に狂った男達は、乱暴に己の肉塊を女達の肉の祠に叩き込み、かつての義兄弟の妻や娘の事を思いやることなく、いや逆にかつて自分達が余りも親しく知っていたため逆に手の出せなかった美しい女達であるが故に、倒錯的な嗜虐の欲望を煽り上げられ、己の欲望を満たすためだけに荒々しく突き立て、無理矢理快楽の果実を奪い入れると、まるで置き土産の様に熱い迸りを女達の体内に注ぎ入れていくのであった。

夜を徹した荒々しい男祭りの様に、男達は異様な熱気に包まれ、まるで不可思議な妖気に取り憑かれたかの様に何時果てることなく何巡にも渡って肉欲の儀式は続き、女達は既にまともな意識も失われつつあり、普通の女なら持ち得ない様な特殊な性技を教え込まれた肉体だけが無意識下で男達の相手をしている状態で、既にまともな神経は全て麻痺していたが、まだ次の順番を待って控える男達は何人も居た。

目高組の者どもに対して積年の遺恨を胸の奥に秘めて来た菖蒲と皐月の姉妹は、今自分の目の前で、これまで自分達の生き血を啜る様に扱って来た大姐達が、かつての自分達と同じように男達に身体を売る一いや、自分達以下の最低の売春婦に墜とされた事を確認して、胸の底から込み上げる様な喜びを嚙みしめ、目に涙を浮かべながら茶碗に注がれた酒をあおるのであった。

「私ゃ今日まで生きて来てこれほど嬉しい日は無いよ！」

と、目から溢れ出る涙を手でサッと払うと、茶碗になみなみと注がれた酒を一機に飲み干した。

そして、「ほら、飲みなよ！」と、自分が手にしていた茶碗を隣に座って順番を待つ男に渡して、一升瓶から酒を溢れそうになるまで注ぎ入れた。

「おう！すまねえな！」

肉欲の欲するままに既に何遍も母娘の前後の快楽の壺に股間の鈍器を突き立て、激しい運動にまだ体内に籠もった熱が逃げ切らず背中からダラダラと汗を流す男は、姉妹から与えられた酒を一口で胃に流し入れた。

「へへ・・・さっきから姐さん達の身体の中に打ちっぱなしで、腰がフラフラするぜ・・・」

お代わりの酒を旨そうに喉に流し込みながら姉妹の方を向いた。

「若いのに、何言ってんだよ！」

と、男の背中をバンと手で叩くと、

「今日私たちは最高に気分が良いんだよ！サービスするよ！」

すっかり酒が回って呂律の怪しい口で叫ぶと、着物の袖から両手を外し、自ら襟を押し下げて諸肌出しの姿となった。

でっぴりと肥満した白い身体から脂肪をたっぷりと載せた大きな乳房がダラリと垂れ下がった。

「さあさあ！順番待ちで暇を扱^あいてる男達は私たちが相手してやるよ！」

と、すっかり酒が回って赤くなった顔で男達に向かって叫ぶのであった。

「美人の親子を目の前にして、そんな女相撲取りみたいな婆を相手に出来っかよ！」

酒の回った姉妹が諸肌脱ぎになったのを見て、自分達の番が回ってくるまで、酒を酌み交わし合いながら待っていた男達からドッと笑い声が上がった。

「何言ってやがんだよ！、昔私たちのダブルパイズリで、さんざん鼻を鳴らしていたのは、何処^{どこ}の何方様だよ？！」

「へへ・・・違^{ちが}いねーや！それじゃ昔を思い出して一つやって貰おうか。」

と、一人の男がノソッと立ち上がった。

姉妹はまるで白い大きな大根の様な乳房を両手に取ると、男のモノを取り囲む様に位置を取り、それで扱き始めた。

「ああー！良い気持ちだ！・・・流石に年期の籠もった姐さん達のパイズリはひと味違うぜ・・・だんだん昔を思い出して来たぜ！」

「だけどアンタも歳だね、たった3、4回大姐達を相手にしただけで、こんなにだらしなくなってしまうなんて！」

連日連夜の度重なる性交で、精力を使い果たしたのか、萎えてしまった男のモノを扱きながら菖蒲が口にした。

「でも、そう言っている間に段々と大きくなって来たじゃないか？」

自分達の得意技で、段々と元気を取り戻し始め、熱さと硬さを増し始めたそれを目にして、皐月が嬉しそうに叫んだ。

姉妹の技巧に段々と復活し始める自分の逸物を眺めながら、

「だけど、最後までやるんじゃないぞ！次は、俺は、お嬢の■■■■コに突っ込むことになって

いるんだからな！フィニッシュはそっちだ！」

「ああ・・・判っているよ！私たちがカチンカチンの立派なチ███に仕上げて上げるから、自慢の匕首を持って、お嬢に向かって行きな！」

やがて、前の組も暁美と晴江に対して愛欲の行為を終了した。

絶望的状况で男の精を絞り出して、死んだ様にグッタリとする二人に息吐く暇も与えずに、姉妹からマッサージされた固く起立した肉茎を突き出しながら、男は暁美に向かって行った。

「どや？お前のココを刺し貫いているの見えるか？」

胡座に座った村崎が背面座位でお竜の肛口を深々と貫き、目の前に置かれた大きな姿見に映る二人の姿を眺めながら、背後からお竜の耳元で囁く様に言った。

村崎に後ろの門を割られてから、どの位時間が経過したのかまるで記憶が無いが、村崎はお竜を後ろから突き立てたまま、器用に身体を動かし、一度も抜き取ることなく色々に体位を変えて、お竜の身体を貪り続けたのであった。

そして、様々な体位を強制する都度、女の弱点を知り尽くした卓越した性技を繰り出し、お竜の内部に秘めていた熱情を引き出し、燃えさかる炎の様に煽り立て、痺れる様な快美感を与え続け、幾度も絶頂に導き上げるのであった。

お竜も銀子の肉体改造訓練やその後の客との交接でその部分を散々廻られた経験を持っているが、いずれも快感とはほど遠い不潔な排泄器官を責め立てられる屈辱感と激烈な苦痛の果てに意識を失ってしまうのが常であった。

しかし、この初老の男の場合は、的確に快美感を紡ぎ出すポイントを探り当て、一体自分のその部分に快感のツボなどが在ったのかと、不思議な思いに駆られるお竜を嘲笑う様に、次々と快感の階段をその背徳の秘孔に串刺しにしたまま登らせて行き、確実にその頂点に追い詰めて行くのであった。

村崎が一突きする毎に、お竜の胸の鼓動は激しく高鳴り、麻痺じみた感覚が拡がって行って頭は麻痺して、朦朧とする意識の中で、この憎むべき男に追い上げられ再び自分は無理やり頂点を極めさせられるんだと、熱に浮かされた頭の中でボンヤリと想像するのであった。

そして、まだ僅かに残されている正常な意識は、もうこれ以上イカされたら身体が持たないーと、悲鳴を上げ続けるのであった。

この初老を迎えた大男は、いったい何処にその様な精力を秘めているのであろうかーと、何度も押し寄せる怒濤の快美感とその後に続く、苦痛を伴った疲労感に苛まれながら、ボンヤ

リと考えるのであった。

この男は女体に深く突き刺した肉の管を通して、女の絶頂時に発する性的エネルギーを吸収してそれを己のエネルギーに変えてしまう様な、吸血鬼ならぬ吸精鬼の様な悪魔じみた魔力を身体に有しており、自分が性の快美感に導かれ、至高の頂き向かう度に、そのエネルギーを奪い取っているのでは無いかーと想像すると、自分が人間ではない恐ろしい魔物に抱かれているのでは無いかー、自分がイケばイク程、自分は体力を奪い取られて疲弊し、一方この魔神は益々自分から奪い取った精力を我が物として、自分が完全に息絶えるまで襲い掛かってくるのではないかと、恐怖を感じるのであった。

その悪魔はより多くの糧を得るため、一時的に人間の女に麻薬じみた快感を与え、悶え狂わせ、女体に快感のエネルギーをまるで風船を膨らませる様にはち切れる迄蓄積させ、それが頂点に達して爆発する時、一機にそれを奪い取り、その後に耐え難い心身の苦痛を残して行くのであった。

既に数え切れない程の幾多の絶頂を迎え、その後に襲い来る疲労感で身動きすることも出来ない程疲れ果てているのに、裏の陰門を貫く村崎の怒張は、未だその堅固さに衰えを見せず、器用に腰を使い、秘められた快樂のスポットを責め上げ、自由な両手でお竜の全身の快感の部位を撫で上げ、それらの巧みな動きが見事なハーモニーを奏でて、お竜を再び天上の高みに押し上げていくことが判った。

何時間とも思えるほど長時間の間に限らない絶頂を無理やり何度も極めさせられ、身体は疲弊し切って身動きを取ることも出来ないというのに、村崎と一つに繋がったその部分だけは物欲しげに蠢き、身体の中に星の様に散りばめられた点の様な快感のスポットと結び付き、絶望的なゴールに向かって押し上げられていることが判った。

「どや？感じてるか？お前のここを刺し貫いているのが判るか？」

村崎が右手の指先をガラガラと女の熱い樹液を垂れ流す女芯に差し入れ、膣と腸を隔てる薄い肉壁越しに腸内に収まった自分のモノの形を確かめる様に撫で回した。

二つの孔からの刺激にお竜がウッと呻いて、身体を強ばらせた。

その瞬間、ふと二人の目の前に置かれた大きな姿見に目が移った。

そこには胡座座りする村崎の肥満した下腹に尻を預ける様に大腿を開いて、村崎のモノを付け根まで受け入れている自分の姿が映っていた。

村崎の寝所に連れられる前に、美しくアップにセットした髪は、今はおどろに乱れ、何本もの乱れ毛が汗を浮かべた額に張り付いていた。

度重なる興奮で桜色に上気した肌に、汗を吸って浅黒くなった麻縄が纏い付き、乳房を上下から挟む様に括り上げていた。

村崎に責め立てられ、ともすれば焦点を失いそうなボンヤリとした目で、鏡に映る自分の姿を見遣った、

柔らかな大きな乳房や横に張ったボリュームのある腰回りを目にとると、自分の身体が如何にも男好きのする特徴を備えた生身の女の身体で在る事に気付いた。

空手や合気道の様な格闘技を身に着け、なまじの男より激しい性格であったために、切った張ったの荒々しい男の世界に身を置いて来たが、やはり自分も唯の女でしかなかったと思いき知らされるのであった。

特に、村崎の逞しい肉茎を深々と受け入れている肉の管の僅か前のパツクリ開いて赤く黒い内奥を見せる部分が目に焼き付いた。

絶え間なく与えられる肉欲に巻き上げられ、物欲しげにダラダラと愛液を垂れ流す、股の奥の最も女である箇所を目の当たりにすると、切った張ったの渡世の世界に身を置く間に最も嫌悪し、封印していた女の本性が目を醒まし、自分の意志を裏切り、男に対して物欲しげに哀願する自分の中の浅ましい女の本性を改めて垣間見た気持ちになるのであった。

所詮自分は女・・・でしかない・・・男の力には敵わない・・・と、哀しい諦めの気持ちがお竜の心の中に拡がって行った。

「ああ・・・親分・・・お竜はもうイキそうです・・・お竜を助けると思って親分も一緒にイッて下さい・・・」

村崎の方に顔を傾げると、擦れた声で哀願するのであった。

精根尽き果てた様な哀れな姿で哀願するお竜の表情にゾクゾクするような色気を感じて村崎が淫靡に唇を歪めると、

「そうか?・・・儂もちょっと疲れてきたところや・・・ほな、一緒にイコか?」

と、嬉しそうな表情で口にする、そのまま言葉を封じる様にお竜の唇に自分の唇を押し付けた。

お竜の舌と絡めながら腰の動きを激しくした。

顔面を汗でビッシヨリと濡らし、村崎の口唇で内から込み上げる喘ぎ声を掻き消され、ウッ、ウッと鼻で息を吐きながら、村崎の口内から流れ出る唾液を、腰をビクビクさせながら啜った。

村崎と舌を絡め合いながら、ウッ!と強く息を吐き身体を硬直させた。

その瞬間、開け広げられたままのお竜の股間から激しい体液が迸り出た。

お竜が絶頂を極めた瞬間であった。

そのお竜の激しい痙攣に併せて、村崎も緊張を解いた。

熱い白濁した粘液が奔流の様にお竜の腸内に向けて注ぎ込まれた。

お竜は白目を剥いて、既に身体は村崎の手の中でグッタリとしていたが、その部分だけは、注ぎ入れられてモノを食欲に中に取り込もうとするかの様にビクビクッと収縮を繰り返し村崎のモノを絞め続けていた。

「何だよ！もう駄目か？・・・全くだらしが無いじゃないか！昨日のお竜姐さんの方がましだぜ！」

男達の責めを受け続け、何とかフィニッシュまで漕ぎ着けた刹那に、死んだ様に布団の上に蹲ってしまった母娘に次の番を待つ男が毒突いた。

疲労感で股を閉じることも忘れて、俯せに横たわる、二人の股間の二つの孔は、今はすっかり閉じる能力を喪失して、ポツカリと赤黒い内奥を晒す秘孔の中からは、女の愛液に交じって幾人もの男達が注ぎ入れた白い粘液が滴り落ちていた。

「ほらほら・・・何時までオネンネしているのよ？お客様はまだ何人も残っているのよ！早く起きてお相手をしなさい！」

遣り手姉妹が、何順目かの男達を漸く自失まで追い詰めた挙げ句、崩れ落ちる様に気を失ってしまった晴江と暁美の尻を交互に蹴り上げた。

「そうは言っても、こんなにユルユルガバガバじゃしょうがないぜ！」

男が足の親指を開き切った晴江の前門に突き入れ中を捏ね回しながら言った。

布団に俯せになったまま、荒い息を吐きながら男の狼藉に抗議する様にウウッと呻き声を上げ、僅かに腰を振った。

「おい、今朝のビデオで見たみたいの一つの孔に二本入れてみようか？」

順番を待つ男が隣の男に提案した。

うっすらとする意識の中で、男達の会話が耳に入り、以前、山崎と内田から華洞に男のモノを同時に埋め込まれた時の激痛の記憶が蘇って来た。

そして、自分だけでは無く娘の方にも男達が向かって行く様子が霞む目の中に入って、

「ああーっ！お願いします！娘だけは勘弁してやって下さい！代わりに私が皆様のお相手を務めさせていただきます！」

と、疲労感で軋む身体を起こして、男達に向かって土下座する様に哀願するのであった。
身も世もあらず泣き叫ぶ様に自分の娘を必死に守ろうとする晴江の姿に、無言で電気棒を手にした菖蒲が、背後に迫ると、サッと電気棒の先を背中に押し当てた。

突然の激痛に晴江が布団の上に倒れ込んだ。

「うるさいね！お客さんはそっちのお嬢ちゃんと遊びたいと言ってるんだよ！アンタはアンタでしっかりとお客さんの相手をすれば良いんだよ！」

と、鬼の様な形相で、吐き捨てる様に叫んだ。

自分の事を庇おうとしたばかりに、折檻を受ける母親の姿を、ボンヤリと霞む意識の中で見て、「お母様、暁美は大丈夫だから暁美の心配はしないで・・・」

と、漸く意識を取り戻した娘が、涙を浮かべながら言った。

「アアーッ！痛い！お母様、助けて！」

暁美が二人の男のモノを同時に挿入され、息も詰まる様な激痛に襲われ、思わず悲鳴を上げた。

「おお！こいつは良く絞まるぞ！」

暁美の体内に二本の陰茎を突き立てた男達は、激痛のあまり泣き叫ぶ若い女に目もくれず、押し寄せる快感に身体を震わせて叫んだ。

娘の悲鳴が耳に飴したが、その隣で男達の責めを受ける晴江には、最早娘の事を気遣う余裕は無かった。

「大姐の方も何年かぶりに若さを取り戻したみたいな絞め具合だぜ！」

晴江も二人の巨根を迎え入れ、苦痛に脂汗を浮かべていた。

「それにしても、お前のチ███に入れた真珠が痛いぞ！」

「うるせえっ！俺の███コと直接触れ合う機会なんてめったに無いんだから有り難く思いやがれ！」

男達は、女の苦悶には目も触れず、己の快感を求めて、ゲラゲラ笑いながら上機嫌で腰を振り合った。

「今度、ここがガバガバになったら次は尻の孔に二本入れてやるからな！」

と大声で笑い合いながら腰を突き立てるのであった。

どれ位、気を失っていたのだろう？ふと気が付くと布団の上で死んだ様に横たわるお竜をま

るで酒の肴にするかの様に、村崎と剛沢が上機嫌で酒を酌み交わしていた。

横には剛沢の愛人達が侍り、男達にお酌をしていた。

「おう、目が醒めたか？長い間寝てたなー」

お猪口を手にした村崎がニコニコと笑みを浮かべながらお竜に声を掛けた。

お竜は相変わらず全裸のままで、後ろ手の縛めも元のままであった。

「なあ・・・アンタら知ってるか？このお竜姐さんはな、アソコを使こうて、凄い芸が出来るんやで・・・」

と笑いながら隣で酌をする若い美人に問い掛けた。

「どや？見てみたいと思わへんか？」

突然問い掛けられた剛沢の愛人達も、是非見て見たいですーと、愛想笑いをしながら鼻に掛かった甘えた声で答えた。

「ほうか？ほな・・・お竜姐さん、ちょっと見せたってか。」

と、疲労が抜けきれず、布団に横たわったままのお竜の方を愉快そうに笑いながら、見つめて言った。

剛沢が立ち上がって、床の間に置かれていた本櫃^{かべ}の八寸盤の碁盤を抱えて戻って来た。碁盤の上では碁筈に入った碁石がカチャカチャと音を立てていた。

「このお竜姐さんわな、あそこん中に幾つも白と黒の碁石を入れて、白か黒か言われた方の石を吐き出す特技を持っているんや！」

村崎が隣に座る香住の手の上に自分の手を重ねながら得意そうに説明した。

剛沢が分厚い碁盤の上に白石と黒石の山を作った。

「ほら！碁盤の上に登って、碁石を吸い上げるんだ！」

「アアーッ！無理です！今は身体が痺れ切って、とても出来ません！もう少し休んだ後にして下さい。」

村崎の突然のリクエストにお竜が涙を流しながら哀願した。

事実、長時間の村崎からの攻撃によりお竜の下腹は痺れ切り、その感覚は完全に麻痺していた。

涙ながらのお竜の哀願にも拘わらず、剛沢がお竜の身体を起こすと、早く芸を始めろと言う様に目の前の碁盤の方に追いやり、ピシャと尻を叩いた。

既にお竜の身体は、疲労で痺れ切り、綺羅羅から教えられた花電車の芸を披露出来る状態では無かったが、剛沢に担ぎ上げられる様に碁盤の上に追いやられ、フラフラと危うい腰つき

で碁盤の上に立つと、ソロソロと腰を降ろして蹲踞の姿勢を取った。

上機嫌で酒を酌み交わす男女が、次を期待する様な目で、お竜の事を見詰めた。

剛沢が作った黒い碁石の山の上に、お竜の腰がゆっくりと降下し、石の上に腰を降ろす様に秘部を押し付け、碁盤の上を撫で回す様に股間を動かした。

次に、お竜が腰を上げた時、其処にあった黒い碁石の山は綺麗に消えていた。

この妙技を初めて目にした剛沢の愛人達は、目を見開き、パチパチと手を叩いて歓声を上げた。

それに続いて、隣に置かれていた白い碁石の山の上に腰を降ろした。

二つの碁石の山を体内に呑み込み、分厚い碁盤の上で蹲踞の姿勢を取るお竜の姿を満足そうに眺めながら、

「ほな・・・どちらの色の碁石を出して欲しいか、言うてみ・・・」

と、香住の細くて長いスベスベした手を無骨なザラザラとした手で撫でながら促した。

「・・・そうね・・・それじゃ黒石を出してみて！」

「お竜さん、聞こえたか？最初は黒石や！」

上機嫌で香住の手を握り締めたまま、お竜の方に顎をしゃくった。

痺れが残る肉洞内部の繊細な感覚を完全麻痺させてしまっているお竜がそれでも何とかリクエストに応えようと、必死に膣周りの筋肉を蠢かせた。

碁盤の上に蹲踞の姿勢で立つお竜の前に陣取った男女の目に、汗を浮かべながら下腹の筋肉をグルグルと蠢かせている姿が映った。

固唾を飲んで見守る、シーンと静まりかえった寝室内に、お竜のその部分からじゃらじゃらと石が掻き回される音が小さく耳に入った。

ウッと小さく呻く様に声を上げ、腰を小さく振ると、お竜の牝芯から碁石が一個産み落とされた。

カチャリと音を立てて落下した碁石を見て、村崎が残念そうな顔をした。

「お竜さん、それは白石や！・・・ほな、もう一遍やってみい！」

華洞内の肉壁から得られる白石と黒石の表面の微細な感触を見分ける繊細な感覚を完全に失っている今のお竜には石の産み分けは不可能となっていた。

それでも不自由な感覚を頼りに、もう一度石を選び分け、産み落とした。

「アホちゃうか？それも白石や！」

碁盤の上に産み落とされた石を見て村崎が苛立たしげな声を上げると、ドッコイショと腰を

上げた。

「お前、石の掻き混ぜ方が足りんのとちゃうか？、どれ、儂が良く掻き混ぜたろ！」

と、言うとお竜を碁盤の上から引きずり下ろし、立位のまま背後からお竜の花芯を割って自分のモノを突き入れた。

「おお！これは良う掻き混ぜるで！」

と自分の怒張が膣内の碁石と触れ合う一まるで小石の敷き詰められた河原に怒張を突き立てこね回すような一荒々しい感触を楽しむ様に歓声を上げた。

両手でお竜の良く張った柔らかな乳房を驚掴みにして揉み上げながら、肉洞内に押し込められた硬い碁石とネットリとした肉壁から与えられる感触に痺れる様な感覚に酔っている風であった。

唯でさえ白と黒の碁石で一杯に満たされた膣内に鉄のように固い村崎の肉棒を差し入れられ、掻き回され碁石と淫肉が柔らかな肉の器の中で擦れ合う激痛に顔を歪めた。

剛沢や愛人達が見守る中で、上機嫌になってお竜を責め苛む老人と、女の命が宿る場所で硬い碁石を掻き回される激痛に悲鳴を上げて腰を悶えさせるお竜の姿が映った。

村崎の肉棒で掻き回され、ボコボコと変形する下腹の表面を、愛人達は手で口を押さえながら嘔然とした目で見続けた。

「どや？こんだけ掻き混ぜたらもう良いやろ？ほな、産んでみい！」

フウフウと荒い息を吐くと、自身は胡座を組んで座り、その脚の上にお竜を座らせた。

そして、さあ、出せと言う様に、お竜の下腹をポンと叩いた。

沢山の石を内部に含んだまま、下腹を叩かれて激痛にお竜がウッと呻いた。

それでも必死になって村崎の命令に従おうとして、肉壁を蠢かせ、華肉の内側の碁石の選別に掛かった。

「おお・・・やっと黒石を出しおった！やはり儂のかき混ぜようが良かったんやな！」

目の前に吐き出されたお竜と村崎の淫液に塗れた碁石を見て見物の男女から歓声が上がった。

しかし、それはたまたま当たっただけで、すでにお竜の石を選別する能力は喪失していた。

「どや、どうやって腹の中で石を選り分けるのか教えてくれ。」

お竜の背後から抱きしめ自分の身体と密着させると、お竜の菊座の中心に自分のモノを押し当てた。

「こうして後ろの穴に儂のを入れておけば、壁越しにどうやって産み分けているのか解るやろ！」

突然侵入を始めたものにお竜の悲鳴が上がった。

「おお！動いてるで！儂のち■■■んに前の筋肉の動きがビンビン伝わって来るで！」

と、薄い膜一枚を通して蠢く膣の筋肉と膣内の碁石の動きを感じて、感激して大声を上げた。

「ほら！もっと良^よくかき混ぜんかい！」

後ろから汗まみれのお竜の体を抱きしめ、熱く火照った女体から立ち昇る芳香を鼻腔いっぱい吸い込みツンと尖った乳首を指先で弾いて声を掛けた。

額にびっしょり汗を浮かべ苦痛に顔を歪めながら、村崎の命令に従って必死になって下腹の筋肉を動かした。

「そや、そや、腹ん中で碁石がジャラジャラ動くのが判るで！」

下腹の特等席を占拠し、一枚の薄い隔壁を通しただけで硬い碁石が自分の肉茎を撫でる快美感にうっとりとした様に声を上げた。

男に快感を与えるその作業はお竜にとって死ぬほどの苦痛でしかなかったが・・・

「ほら、もう一ぺん黒石を出してみい！」

右手で豊かな乳房を鷺掴みにして、左手で秘部の周囲を撫で回し、掌で腹の中で蠢く碁石の動きを探りながら命令した。

腸内深く突き立てる村崎の怒張に前の筋肉がギュウッと収縮していくのが感じられた。

苦しそうに眉間に皺を寄せて、固く瞼を閉ざしながら、ウッウッと声を上げ、背後から村崎に突き立てられながら、お竜の牝芯を割って碁石が飛び出した。

「出来たやないか！大したもんや！ほな今度は白石を生んでみい！」

「ああ・・・無理です、もう出来ません・・・」

げっそりとやつれた顔で哀願した。

「何を言うてんのや！碁石は、まだ腹ん中に仰^{ぎょう}山残っておるで！」

非常な言葉に堪らなくなったお竜が大声で泣き出した。

「自分でかき混ぜられんーちゅうのやったら、又儂の珍棒で掻き回したろか！」

元女侠客としての強い女の仮面を破り取られ、惨めに泣き叫ぶお竜の姿に変質的な嗜虐の喜びを掻き立てられ非情な言葉を投げ続けるのであった。

蜘蛛の糸に絡めとられた蝶のように身悶え泣き叫ぶ哀れな元女博徒の姿を剛沢の愛人たちがじっと見つめていた。

「お見事、お見事！とうとう全員の分を搾り終えたわね！」

すっかり酒が回って酩酊状態の姉妹が、酔ってふらつく身体を互いに寄り添いながら、ゲラゲラと大きな笑い声を上げて、上機嫌で手を叩き喚く様に言った。

母と娘の身体を存分に蹂躪し尽くした男達は、今は己の精を出し切った後の心地良い疲労感に浸りながら、グッタリと死んだ様に横になる母と娘を取り囲んで、互いに酒を酌み交わし合っていた。

休む間も与えられず、獣の様な男達に全身の甘美な壺を蹂躪され尽くした女達は、最早股間を綴じ合わせ、恥ずかしい所を隠す力も喪失して、しどけなく開いた秘部の二つの孔からは、男達の置き土産の白い濁液が滴り落ちていた。

激しく肩を上下させ荒い息を吐く口からも唾液に混じって、男の白い粘液が溢れ出ている。一人の男が、晴江の脚に自分の脚を絡めると、手繰る様に股を拡げさせた。

意識が朦朧とする晴江は男の脚で股間をこじ開けられても、抵抗する力は最早残っていない様で、そのまま扇の様に開かされてしまった。

そして大きく開いた灰暗い中心部の孔からドロリとした粘い白濁した液が流れ出し、男達が笑い声を上げた。

そんな二人の様子を繁々と眺め回しながら、すっかり溜飲を下げた姉妹が、嬉しそうに、「並の娼婦なら泣いて逃げ出す様な性豪を13人も相手に最後まで頑張れたんだから、これであんた達も一流の娼婦としての箔が付いたってモンだよ！」と、とうとうこの女達を此処まで墜とし込んだと言う喜びが込み上げて来て、さっきまでの男達に交じっての大笑いから、うれし涙を流しながらの泣き笑いに変わり、溢れ出る涙を拭いながら感激して叫んだ。

姉妹はフラフラと立ち上がると、酒に酔った覚束ない足取りで晴江達の元に歩み寄り男達の濁液に全身塗れてグッタリと横たわる母娘の様を蔑んだ様な目付きで眺め回し改めて快哉の笑みを浮かべるのだった。

そして、力無く仰向けに横たわりだらしく股間を拡げたままの母娘の傍らに立つと残忍な欲望が込み上げて来た姉妹は、足裏でグリグリと下腹をこね上げるのであった。

「おや？腹の中に入っていたモノがドンドン出て来るじゃないか！」

踵で曉美の下腹を扱き上げながら、股の間の空ろの中から白濁した粘っこい液がドロドロと流れ出して来たのを面白そうに皐月が嬌声を上げた。

「ああ・・・痛いわ・・・」

未だ朦朧とする意識の下で、皐月の体重を載せた足裏で扱かれ、眉根に皺を寄せてむずかる様の顔を左右に振った。

「ホホホ・・・こちらの大姐さんは前の穴からも後の穴からもダラダラ流し始めたよ！ちょっと押しただけでこんなに溢れさせて・・・ちょっと締めりが緩いんじゃないかい？」

菖蒲が足裏に体重を掛けてグイグイと晴江の下腹を責め立てながらゲラゲラと笑い声を上げた。

意地悪く足を持ち上げて反動を付けて蹴り込む様に、グイッと下腹にめり込む程足先に圧力を加えた刹那、晴江が苦しそうに身体を蝦の様に丸め、秘裂の狭間からビュッと黄色い液が飛び出た。

「本当にこの大姐さんはここの締めりが緩いね！？ちょっと押しただけでオシッコまで漏らしてしまったよ！」

グイグイとリズムを付けて胎内に溜まった液を搾り上げながら、おおきな笑い声を上げた。

晴江の身体から溢れ出た液が敷かれた布団の上に染みを作っていた。

「ああ・・・っ・・・もう・・・お許し下さい・・・」

かつては売春婦上がりの下等な女と侮蔑していた遣り手女達から暴行を受けても最早反発する気力も体力も残されておらず、力無く頭を左右に振りながら暴力行使者に哀願の言葉を発するのであった。

「おい、また小便がしたくなってきたな・・・」

明け方に近づき身体が冷えてきたのか、一人の男が身体をブルッと震わせて呟いた。

「それじゃ昨日みたいに此奴らを公衆便所にするか？」

それを聞いたもう一人の男がニヤッとイヤらしい笑みを浮かべて男の方を見た。

男達の呟き声を、母娘を責め立てながら皐月と菖蒲の姉妹が耳に挟むと、

「ねえ・・・公衆便所・・・で、何？」

と、男達の陰險な思い付きの意味を問いただす様に淫靡な笑みを浮かべて男達の方を振り返った。

「まあ、黙って見てな！」

二人の男が立ち上がると、布団の上に仰向けに横たわったままの母娘の方に近づき、姉妹と持ち場を交替した。

最早逆らう力も残されておらず、布団の上に仰向けに横たわる女の身体に手を掛けると、ヨ

イコラショと俯せにひっくり返した。

次に何が始まるのかと、姉妹はギラギラする目で男達を見守った。

周囲を取り囲む男達も、ニヤニヤとイヤらしく口元を歪めて黙って酒を啜っていた。

俯せにした母と娘の両脚を驚掴みにして大きく左右に広げさせ、その中心部を露わに露出させると、次に尻たぶに両手を掛けて大きく左右に押し広げた。

未だに白濁した液を垂れ流し、うっすらと口を広げて内部の虚ろを垣間見せる、菊の花に似た部分が露わとなった。

抵抗の気力も体力も失せて男達になすが儘の女達は、布団に顔を埋めたまま、イヤ・・イヤ・・と顔を振り小さな声で悲鳴を上げた。

女達のむずかる様な涙声を心地良く聞いた男達の股間のモノが見る見る鎌首を擡げ始めた。

そして、それを開花したままの菊の花の中心分に宛がった。

混沌とする意識の中で、再び後門を貫かれることを理解した女達がヒィと小さく悲鳴を上げた。

男達は俯せの女達の身体の上に覆い被さる様に身体を預けた。

未だに痺れが残り、感覚が回復しない肉洞ではあったが、狭い門をこじ開けて肉の洞窟の中に男達の太いモノがグイグイとねじ込まれて来る事が判った。

「へへ・・根元まで入ったぜ！判るかい？・・お嬢ちゃん」

暁美を背後から貫いたまま男が、俯せのまま横たわる暁美に声を掛けた。

男の体重を身体に感じながら、直腸の内部から込み上げる異物感に暁美が虚ろな顔で首を振った。

ピッチリと根元まで肉茎をくい込まされた次の瞬間、肉洞の内部を襲う怒張の先端から熱い液体が、まるで水道の栓を捻った様に迸りだしたのを腸内に感じて、男から逃れようとするかのように腰を蠢かし、鋭い悲鳴を上げた。

「へへ・・お前の糞袋の中に俺様のオシッコが入っていくのが判るかい？」

必死で腰を蠢かせる暁美の動きを上からガッチリと押さえ込んで封じ、腸内に小水を注ぎ込みながら男が笑い声を上げた。

隣では晴江の腸内に男が小便を注ぎ込み始め、晴江が身悶えしていた。

「成る程・・公衆便所とはこの事だったのかい！」

皐月が笑い声を上げた。

「全くお前達のような最低の娼婦^{オシナ}には、男の便所になるのがお似合いだよ！」

菖蒲も一升瓶から茶碗に酒を注ぎ込み、一機に喉に流し込んでから、歓喜に叫ぶ様に声を上げた。

「しかし、女の尻に入れたまま小便をするなんて貴男たちも器用なモンだね！」

女の腰を少し持ち上げる様に抱えて、腰を密着させたまま、体内に注ぎ込む男をジッと見詰めながら皐月が感心した様に声を上げた。

「へへ・・・随分と溜まっていやがったぜ！」

最後の一滴まで女達の腹の中に注ぎ込んで、さっぱりした顔で男達が漸く結合を解いた。

「それじゃ次は俺たちだ・・・」

最初の男達が母と娘の身体を離すや、次の男達が腰を上げて二人に迫った。

激しい疲労感を全身に感じたままの晴江と暁美であったが、男に便所代わりにされるというショックで意識は完全に取り戻していた。

「おいおい！何処に行こうとするのだ？」

疲労困憊した身体を引きずって必死に男達の手から逃れようとする女達を、残忍な笑みを浮かべた男達は、苦もなく押さえ付け、女達の菊花を割って自分の肉茎をくい込ませようとした。

メリメリと肉洞を押し分けて侵入してくる男の熱い塊を感じながら、再び男達の便器代わりにされるという惨めさと屈辱感に晴江も暁美も人目も憚^{はばか}らず大声を上げて泣き叫び始めた。大きなヤクザの組の大姐やお嬢で在ったという過去の威厳を完全に奪い去られ、ワンワンと涙を流して泣き叫ぶ母娘の姿を目の当たりにして、恨み重なる目高組の頂点に居た女達をかつて自分達姉妹も経験した事の無い様な汚辱の淵まで墜とし込む事が出来たという快感が、まるで電気のように身体を貫き、心臓は高鳴り、身体はブルブルと震え始めた。

そんな嵐の様に激しく襲い来る電撃にも似た快美感に伴う震えを少しでも沈めようと、姉妹は互いに忙しなく茶碗酒を乾いた喉に流し込んだ。

「どや？どや？まだ石を出せんか？」

疲労困憊して体を起こす事も出来なくなったお竜は布団の上に倒れこんでしまったが、そんなお竜ともつれ合うように村崎もお竜を背後から抱きしめたまま布団に突っ伏した。

布団に俯せになったお竜に折り重なるように体を預けた村崎は激しく腰を使っていた。

お竜の胎内に大量の基石を納めさせたまま、村崎は執拗に背後から突き立て続けた。

膣内に大量の碁石を埋め込まれたまま、薄い布団と背後から押し掛かる村崎の体重を受けサ
ンドウィッチ状態にされ激痛がお竜を苦しめた。

苦痛の余りお竜は村崎に抱かれながら大声で泣き叫び続けた。

しかし、そんな哀切の涙も、村崎にとっては伝説の強い女をここまで屈服させたと謂う征服
感の歓喜に化すのか嬉々として腰を振り立てるのだった。

非情な老人のいつ果てるとも知れない暴力行為の前に泣き叫ぶ哀れな女の姿を見せつけられ、
剛沢の愛人たちは体を震わせ残忍な風景を見続けた。

涙も枯れ果てたのか、お竜の鳴き声も次第に小さくなって行った。

それと置き換わるように次第にハアハアという喘ぎ声が大きくなって行った。

布団の上でお竜を組み伏せていた村崎は体位を入れ換え、自分が下になってお竜の体を自分
の肥満した腹の上に乗せ上げた。

村崎から下から突き続けられるお竜の喘ぎは次第に激しくなって行った。

白目を剥き、だらしなく開いた口の端からは涎が流れ落ち、既に意識は無いように思えた。

「ああ・・・もう駄目・・・ああ・・・もう駄目・・・お竜はイキます！」

と、突然熱病に浮かされたうわ言の様に叫ぶと、次の瞬間体を激しく痙攣させた。

それと同時にお竜の膣内に納められた夥しい碁石がまるで機関銃から発射される弾の様に体
外に打ち出された。

「この^{おなご}娘！潮吹く代わりに石を噴き出しよったで！ホンマにオモロイ奴や！」

と、大声で笑い上げるのであった。

女達の悲鳴の様な泣き叫ぶ声を完全に無視して、いやそれ以上に女達の悲鳴が己の残忍な快
感を余計に呼び起こされるのか、男達は女の菊門に深々と自分の肉棒を突き立て、汚辱の排
泄液を注ぎ込むのであった。

「もう辛抱出来ねえー！俺は口の方を使わせて貰うぜ！」

身体が冷えて、強い尿意が込み上げて来た男が駆け寄る様に暁美の前に飛び出して来た。

そして暁美の上半身を無理矢理起こして、鼻を摘んで口を開けさせると、其処に自分の醜い
モノを突き入れた。

突然の狼藉に暁美が目を白黒させて悲鳴を上げようとしたが、男の肉棒を口内深く突き立て
られ悲鳴を封じられた。

「今からお前の口の中に流し込んでやるから、一滴も溢さず呑み込むんだぞ！」

と暁美の頭を抱え込んで口の中にねじ込みながら、男が緊張を解いた。

たちまち鉄砲水のように暁美の口内にアルコール臭い汚濁の液体が流れ込んだ。

「へへ・・・お前達は昨日村崎親分の小便を飲んだじゃないか。どっちが旨いか行ってみろ！」

暁美の口内に排泄しながら、男が笑い声を上げた。

今や二人の男にサンドウィッチにされた暁美は前の穴と後の穴から体内に小水を流し込まれていた。

それを見ていた別の男が面白がって晴江の口をこじ開けて、肉棒を突き立て排泄を始めた。

晴江も最早抵抗することも出来ず、顔を硬く閉じ眉間に皺を寄せ喉を上下させて男の悪臭を放つ排泄液を喉を痙攣させながら必死に飲み下していた。

「ちょっと！・・・面白そうな事をしているわね！実は私達ちもさっきから厠に行きたくて仕方無かったのよ。少し、この公衆便所を借りても良い？」

男達の排泄が終わるのを待って、皐月と菖蒲の姉妹が男達に抱き抱えられた儘の母娘の傍に躡り寄った。

姉妹の言葉を面白そうに聞いた男達は、

「良いとも、良いとも！この公衆便所は男女共用だぜ！どんどん使ってみねえ！」

と笑いながら声を上げた。

そして、女達が用を足しやすい様に、俯せに寝かせていた母と娘をゴロリと仰向けに姿勢を変えた。

そして、そのまま両足首を握って腰を持ち上げさせ、その間に別の男が女達の腰の下に座布団を折って差し込んだ。

それは、双子姉妹に用便をさせながら同時に男達も腸内に排泄しようという企みであった。

男に両脚を抱えられて大きく開股の姿勢にされ、腰枕に載せられ高く持ち上げられた、剥き出しにされた股間には二つの羞恥の祠がこれ見よがしに開陳していた。

その恥ずかしい晴江達の姿に男達が笑い声を上げたが、女達には最早男の腕力を前に股を閉じ合わせようとする力も気力も残っておらず、男達の下卑た笑い声の中でメソメソと啜り泣きをするだけであった。

「へへ！ケツの穴の位置が高くなって、本当に小使用の朝顔みたいになったぜ！」

と男がゲラゲラ笑いながら、股間からダラリと垂れ下がった醜い肉塊を晴江の菊の蕾にあてがった。

異常な環境下における興奮から、たちまち男の陰茎は屹立始め、醜い鎌首を擡げ始めた。

「それじゃ私等はこちら側の金隠しを使わせて貰おうかね・・・」

皐月が着物の裾を捲り上げながら晴江に近付いた。

「ああ・・・嫌、やめておくれ・・・」

昔蔑んで使っていた売春婦の尿を飲まされる事を知った晴江があまりの惨めさに目に涙を浮かべて哀願した。

「便器のくせに五月蠅いね！便器は黙ってオシッコを受け入れれば良いんだよ！」

そんな哀切の籠もった晴江の哀願を無視する様に皐月がビシヤリと言い放った。

着物の裾を腰の上までたくし上げ、肥満して贅肉の乗った白い尻が剥き出しとなった。

まるで相撲取りが土俵の上で蹲踞の姿勢を取る様に女の顔の上で股座を拡げた女達の股間の奥の様子が取り囲む男達の目に露わとなった。

「しかし、昔は綺麗なピンク色してたくせに汚ったね一色に成りやがったな！」

「それに昔は綺麗に下草を刈り揃えていたのに、ボーボーじゃないか？」

茶碗酒を片手に姉妹の剥き出しとなった股の奥の様子を眺めながら、周囲を取り囲んだ男達が笑い声を上げていた。

「五月蠅いねー！あんた達も昔は此处に突っ込んで散散鼻を鳴らしていたくせに！今でもこのお味は、こんな駆け出しの売春婦なんかには負けないよ！どうだい？試して見るかい？」と、揶揄する男達を睨み付けながら怒鳴った。

「まあ、今回は遠慮しとくわ・・・」

姉妹に言い返されて男達がたじたと答えた。

「それじゃ行くよ！」

皐月が残酷な笑みを浮かべてグッと腰を下げ、その肥大した肉ビラが晴江の唇に触れそうになった。

晴江の瞳は、諦めの色に沈んでいた。

「もうお腹の中は今にもオシッコが溢れ出しそうでパンパンだというのに、こうやって皆で眺められていると出ないモンだね・・・ちょっとそこの周りを嘗めて見てくれないかい？」

暁美の顔の上に腰を沈めた菖蒲が、尿道の周りを舌で刺激する様に命令した。

今やこのお抱えの娼婦上りの下等な女にも逆らう事は出来ないと哀しく諦めた暁美は、熟れきった女の臭いを立ち昇らせる肥大した秘裂の奥に怖ず怖ずと舌先を延ばして行った。

「どうだい？随分熟れきったお肉だと思っているんだろう？」

ジャングルの様に濃密に繁る下草を舌先で掻き分け、必死の思いでムッとする秘孔を嘗め回す暁美の心を見透かす様に菖蒲が声を掛けた。

「借金の方に・・・お前の父親や母親から強制されて、何千人も・・・数え切れない程の男に抱かれて擦り切れたマ███のなれの果てだよ！良く見ておくんだね！これがお前達の将来の姿さ！」

暁美の顔の上に腰を降ろし、舌技を受けながら菖蒲がヒステリックな笑い声を上げた。

むくつけき香りを発する女肉の奥に必死に舌先を繰り出しながら絶望的な思いで菖蒲の笑い声が耳の底に流れ込んでいた。

「しかし、アンタも中々上手だね！流石に銀子さんの仕込みが良かったんだね！・・・良い気もになって来たよ・・・ホホ・・・もうすぐ出そうだよ！」

尖らせた舌先で尿道孔を丹念に刺激され、快感を掻き立てられた菖蒲が嬉しそうな声を上げた。

残忍な笑みを浮かべ、そら出すよ！と、一声上げると尿管が開き、暁美が悲鳴を上げる間も無く、開け放たれた口の中に熱い濁液を放出し始めた。

最初はチョロチョロした流れであったが瞬く間に滝の様な激しい流れとなった暁美の口腔内に流れ込んだ。

それと歩調を合わせる様に暁美の腰を抱え込んだ男が、深々と埋め込んだ肉の管から腸内に排泄を始めた。

隣では皐月が晴江の口中に排尿し男が尻穴の中に尿を注ぎ込んでいた。

「ほら？美味しいかい？酒をたっぷり飲んだからアルコールが一杯混じっているから美味しいだろう？」

皐月が小気味良さそうにゲラゲラ笑い声を上げながらほとぼしらせ続けた。

女達は上下の口から汚水を流し込まれ、苦しそうに呻き声を上げながら身悶えさせていた。

そんな様子を取り囲む男達が笑い声を上げながら淫靡な目付きで見詰めていた。

そんな男女の熱狂の輪から離れた所で銀子が一人壁に背を預け脚を投げ出して座りながら、手酌で注いだ酒を喉に下しながら醒めた目付きで下劣な男女の饗宴を眺めていた。

男女の全員の尿を体内に注ぎ込まれた母娘が悲惨な境遇を噛みしめる様に涙を吸り上げながら薄い布団の上に横座りで互いに支える様に抱き締め合っていた。

男達の排泄液が下腹を内部から押し広げる様な重苦しい膨満感が母娘を苛んでいた。

小水の成分は腸内液の成分に似ているため、浣腸液の様な急激な排泄感は誘発しなかったが、やがては注ぎ込まれた排泄液が便意を誘起することになるはずであった。

「へへ・・・俺たちのオシッコを腹一杯流し込まれて少し腹が出て来たんじゃないか？」

啜り泣きをしながら抱き合う晴江と暁美を取り囲む男女は、二人の体調の変化を見逃すまいと、少し膨らんで見える柔らかな曲面を描く下腹の様子を見ながら酒を酌み交わし合っていた。

ああっ・・・と暁美が身体をピクッと蠢かせ切なげに小さく溜息を吐いた。

娘を抱きしめる晴江も自分の体内に発生し始めた体調の変化から、娘の身体の中の様子を察していた。

そして、一度発生し始めた腸内の動きは押し止めようとしても止める事は出来ず、益々激しい痙攣となって母娘の下腹を襲い始めていた。

きつく眉を蹙め、下唇を噛みしめて、下腹を襲い始めた苦痛を耐えていることに気付いた男達が、額に汗を浮かべて互いに抱き締め合う母娘に声を掛けた。

「へへ・・・随分と苦しそうじゃないか？」

「下腹がピクピクと痙攣しているぜ！」

「グルグル腹が鳴るのが聞こえるぜ！」

「ケツをブルブル震わせてよ・・・そんなに糞してえのかよ？」

腸を振る様な絶え間ない苦痛に身悶える母娘の姿を眺めながら、取り囲む男達が何かを期待する様に笑いながら声を掛け続けた。

下腹から込み上げる耐え難い刺激に、苦悶の脂汗を浮かべて身悶えていた晴江が、

「アアッ・・・もう駄目です・・・お願いですから・・・ほんの少しの間で良いからトイレに行かせて下さい。戻りましたらまた皆様のお相手をさせていただきます・・・」

と、無駄と知りつつ冷酷な暴力行使者に哀願するのであった。

「へっ！便所だってよ！お前ら自分が公衆便所のくせに便所に行きたいって言うのかよ？！」

「そうだ！そうだ！見てやるから其処で放り出して見ろ！」

すっかり酔いの回った男達がゲラゲラ笑いながら叫んだ。

「アアッ・・・そんな・・・」

腸を内部から挟む様な激烈な便意を堪えながら母と娘は涙を浮かべながら呟いた。

ブルブルと腰を振るわす女達の様子からいよいよ限界が近いと感じた男達が、

「昨日はお竜に水盤を使わせたが、一つしかないし・・・困ったな・・・二人同時では・・・」

と困った表情を浮かべた。

「縁側の雨戸を開ければ、直ぐに庭だから表でやらせれば良いじゃない？」

一人離れて手酌で酒を飲んでいた銀子が醒めた声で言った。

おお！それは良い考えだーと男達は立ち上がると障子を開いて、縁側に出て雨戸をガラガラと開いた。

ムツとする様な濃密な男女の陰臭と肉欲に狂った男達の異様な熱気で噎せ返る様だった部屋の中にサッと冷たい夜気が舞い込んだ。

「昨夜はお竜が放り出した汚い物を片付けた後も部屋に強烈な臭いが残って良く眠れなかったけど、外でやらせればそんな苦勞もしないで済むぜ！」

「ほら！立つんだよ！」

と、男達は腰が抜けた様にしゃがみ込む晴江達の身体に手を掛けると立ち上がらせようとした。

ついこの間まで目高組と親しく兄弟付き合いしていた暴力団組織の親分連中から肉体を蹂躪され、今又恥ずかしい排泄姿を晒さねばならないのかと思うと、悔しさと惨めさで大声で泣き叫びながら布団の上に這いつくばる様に抵抗するのであった。

しかし、かつての義兄弟の評判の美人妻やその若くて綺麗な娘への嗜虐の欲望に狂った男達は女達の絶叫の様な泣き声が、逆に哀切に満ちた泣き声が心地良い音楽とでも聞こえているのか、益々暴虐の心を露わにして、無理矢理二人を抱え込む様に引き起こして、そのまま引きずる様に庭へ連れ出し、庭の上に柔らかに植えられた芝生の上に腰を降ろさせたのだった。

「それじゃ、お待ち遠様！もう腹が苦しくて我慢出来ないんだろ？此処なら幾ら汚いモノを放り出しても大丈夫だから、伸び伸びとした気分で、好きなだけ糞を放り出すが良いぜ！」
芝生の上に蹲り涙に咽ぶ母と娘を見詰めてゲラゲラと笑いながら叫ぶ様に言った。

「ほら！出すんだよ！・・・出して見ろよ！」

一人の男が、体内から込み上げる苦しさに身悶えしながらも、最後の一線を死ぬ思いで守ろうとしている晴江の尻を邪険に蹴り上げた。

そんな男達の暴力に晒されながらも、腹内から込み上げる激痛に腰をブルブルと震わせ、全身に脂汗を浮かべながらも奥歯を噛みしめて必死に、この男女の目の前で最後の一線を越え

て落下微塵の姿を晒すことに恐怖を覚えて堪える晴江と暁美であった。

「ちょっと！貴女たち！折角村崎會幹部の兄さん達が親切に、ウンチをさせて上げようと言っているのに何を意地を張っているのさ？！」

菖蒲と皐月が鼻じらんで二人に詰め寄った。

「フン！そんなに意地を張って我慢したいなら、好きなだけすれば良いさ！」

と、憎々しげに吐き捨てると、

「そんなに我慢したいなら手伝ってやるよ！それじゃ、これで栓をしといて上げるから堪えられるだけ堪えてみな！」

と、目に残忍な光りを浮かべ狡猾な笑みを浮かべながら懷から黒光りする双頭の張り型を取り出すと、断末摩の苦しみにのたうつ母娘に見せ付けるのであった。

それは、先程何度も目高組を見捨てた憎い男達の前で恥ずかしい絶頂の姿を晒した時に使われた剛沢の逸物から型取りした双頭のディルドウであった。

遣り手姉妹の残忍な思い付きに、最早我慢の限界を迎えて歯を喰い絞めて必死に堪えていた母娘は声も上げることが出来ず、顔面を蒼白にさせた。

へッ！それは面白いぜ！と、男達は遣り手姉妹の提案に載せられ晴江と暁美をその部分でつながらせようと断末摩を迎えてブルブル腰を振るわせる母娘の身体に手を掛けた。

イヤッ！ヤメテ！と悲痛な叫び声を上げるのも耳に入らないかの様に男達は、手脚をばたつかせて抵抗する女達の尻が向き合う様に位置を取らせると、二人の腰の間に黒々とした双頭の張り型を配置し、その先端をピクピクと痙攣を繰り返すセピア色の菊花に宛がった。

男達に腰を押さえ込まれ肩を押す様に両側から押さえ付けると、限界を迎えている二人の菊花を押し開けながら野太い張り型がズブズブと呑み込まれて行った。

固く閉じ合わされていた肛門括約筋をこじ開け巨大な亀頭部分が狭い狭間を潜り抜けて埋没した時、二人の女の口からつんざく様な悲鳴が上がった。

そんな女達の悲痛な叫び声にゲラゲラ笑い声を上げながら、更に力を込めて二人の身体を前後から押し付けたので、男達の見守る前で太い張り型がズブズブとめり込んで行った。

「へへ！・・・浣腸液で中が潤滑されているからグングン入っていくぜ！」

興奮した男達が額に汗を浮かべながら、周囲から女達の身体に手を掛けて押し続けた。

ピッタリと隙間のないシリンダーにピストンを押し込む様にメリメリと外部から押し込まれる強い力と腸内で激しく荒れ狂う渦がぶつかり合い、直腸から胃に向かって内容物が腸内を逆流するような激しい奔流に額に脂汗を浮かべながら身悶え続けた。

「おお！とうとう根元まで入ったぜ！」

母と娘の尻が互いにぶつかり合い、双頭の張り型が根元まで体内に吸収されたことを確認して男達が歓声を上げた。

重なり合った二人の女の臀肉の狭間には二つの張り型を繋ぐ中央の大きな球形部分を残して完全に埋没していた。

そして中央の球状部分が排泄口を外部からピッタリと閉じ込めていた。

晴江も暁美も腹内から込み上げる苦しさに、互いに球状部分に双臀の狭間を押し付ける様に身悶えていた。

「二人とも離れられない様にこれで縛り付けてしまおうぜ！」

酒に酔った男達が自分達が脱ぎ散らかした寝間着の帯を手に、その部分で犬の様に継がった女達に迫った。

ああ・・・もう助けて下さい！と言う女達の哀願を無視して、互いに重なり合った太股や膝を帯でキッチリと結び上げ、二人の尻が剛沢を模したモノで結ばれたまま離れられない様固定した。

体内から込み上げる苦痛と絶望的な状況下で泣きわめく女達の口をこじ開け、五月蠅いと言わんばかりに、浴衣の帯で縛り上げ猿轡とした。

「へへ・・・それじゃ俺たちは其処で見てやるから、やせ我慢を通してみな！」

縄止めを終わった男達が尻で継がった母娘の傍からゾロゾロと離れ、縁側の上に鈴なりに腰を降ろして身悶える二人の女の姿を見物し始めた。

限界を遙かに超越した状況下で、出口を求める強い腸内圧力は、出口を扼する太い張り型をメリメリと外部に押し退けようとし、その結果、相手側により多くその先端をめり込ませることになった。

一方それを受けた相手側も今にも暴発しそうな腹内の圧力に新たな圧力を引加され強い内圧を誘発し、逆に反対方向に張り型を押し出す結果となり、そのことが更に次の運動を誘発した。

互いの尻を密着させた晴江と暁美の間で一本の張り型の中央部分が僅かではあるが、右に移動したり左に移動したりする様子が見物する男達の目にハッキリと映った。

おお！大姐が娘の方に押したぞ！とか、お嬢が大姐の方に押し返したぞ！とか、尻の狭間の間から僅かに垣間見える黒光りする張り型のピストンの様な動きに男達が暢気に歓声を上げ

た。

縁側に腰を降ろしたまま、互いに酒を酌み交わし合い、絶望的な状況下で悲鳴の様な叫び声を上げながら身悶える母娘に無責任な声を掛けて応援したりして笑い声を上げていた。

「ほんとに馬鹿だね！さっさと男達の前でぶちまければ良かったものを・・・やせ我慢するからこういうバチが当たるんだよ！」

「まあ、これも身から出た錆って云うやつさ・・・」

男達に交じって皐月と菖蒲の遣り手姉妹も残忍な目で悶え苦しむ二人を見詰めた。

この間にもピストンの前後運動に刺激され誘発されて腸内の圧力は更に激烈となり、腸壁と張り型の狭い隙間を抜けて濁液がピストンに押されてビュッと漏れ出て相手の双臀を濡らすことはあったが、僅かばかりの腸液の漏洩では固形物の混じった汚物から誘発される二人の美女の腹圧を減少させるには全く及ばず、逆に汚液により全体が潤滑された双頭の張り型はその滑りが良くなり、今やバイブレーターのように素早い動きとなって、母娘の間を往復していた。

この激しく出入りする剛沢のモノを模した張り型が、地獄の様な苦痛の中で、不可思議な快美感を誘発するのか、晴江も暁美も四つん這いの姿勢のまま背を海老の様に反らし、白目を剥き、眉根を苦しげに寄せ、今まさに絶頂を迎えようとする女の様であった。

事実密着した二人の股間は互いが噴出する汚液と汗と陰唇より湧き出る愛液の混じり合った怪しげな体液に塗されビショビショになっていた。

「おい・・・少し匂ってきたぜ？」

「ああ・・・ウンコの臭いと熟れた雌の匂いが混じり合った臭いだぜ・・・」

風向きが変わって庭の方から縁側に向かって流れ始めた微風により、二人の女体から発する臭いが男達の方に伝わって来ていた。

二人の大腿を互いに固定していた帯は、激しい動きで今はすっかりと緩んでしまっていたが、想像を絶する様な苦痛とその中から生じてきた怪しげな快美感に陶醉した感のある母娘は、今や誰に強制された訳でもないのに、女体の本能に命じられるままに互いに尻を押し付け合い、獣の様な呻き声を上げながら、互いの腹圧により繰り出される張り型のピストン運動に酔い痴れている感じであった。

そして、悲鳴の様な絶叫が同時に二人の喉から発せられると、犬の様に四つん這いになった

身体を一瞬硬化させ、その次に頭から地面に崩れ落ちていった。

高く擡げられた二人の尻は天を向き、其処に出来た隙間からズボッと云う様な大きな音を立てて二人の肛門を塞いでいた、どす黒い張り型を真上に向けて吹き上げた。

出口を扼していた栓が抜けたことで、腸内に溜まっていた汚物が火山が噴火する様に噴門を押し開き外部に飛び出した。

暁美の肛門から強い腹圧により吐き出された液状化した便は、放物線を描き晴江の彫り物を施した背の上に雨の様に降り注いだ。

そして、晴江の体内から放出された軟便が暁美の白い身体の上に浴びせられた。

張り型を吹き飛ばした瞬間に激しい絶頂を迎えた晴江と暁美は、白目を剥いたまま口を大きく開いてハアハアと激しく肩で息を吐いていた。

二人の開いた儘の肛門からはいまだビュッビュッと激しく腸内に溜まった排泄物が噴き出し、互いの白い身体を穢し合っていた。

「これは、臭くて敵わんぜ！」

縁側で立ち上がって見詰める男達は、互いの吹き上げる糞便により全身汚物塗れになって身悶える母と娘の姿に、狂気に駆られる様に快哉の叫び笑いを上げるのであった。

男達の嘲り笑いの中で、激烈な苦痛の末に完全に意識を喪失し、互いに尻を向けたまま今は力無く芝生の上に横たわる母娘の肛孔からは未だに絶えることなくドロドロとした汚物が流れ続けていた・・

こうして、村崎會の男達は更に2泊して、その間に、かつての親子や兄弟の杯を交わし会った組長の女房と娘と愛人に、思い付く限りの変態的陵辱を加え続けた。

まさに女にとって生き地獄のような暴虐の嵐に晒した後、剛沢から大金と数々の高価な土産の品を受け取り、次回の上納金の受け取り時にまた来ると約束して、満足したように立ち去って行った。